

日本IT書紀

04 含牙篇

巻之九 修羅

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

04 含牙篇

卷之九 修羅

066 ターニングポイント

067 ランチェスターの法則

068 寂寥

069 V T 信管

070 修羅

071 P L A N & D O

072 火炎

066 ターニングポイント

第六十六

ターニングポイント

一

太平洋戦争の転換期は一九四二年六月五日のミッドウェー海戦だと言われる。しかし陸上（島）の戦いを含め流と七月から十一月にかけての五か月が転換期ではなかったか。強いてしよれば、九月・十月、すなわちガダルカナル島の攻防ということになるであろう。

破竹の勢いで勝ち進んだ日本軍の攻勢に歯止めがかかり、アメリカ軍が勢いを盛り返すには、いくつかの幸運と不幸が必要だった。個々の戦局においては、次のような出来事が記録されている。

6・5 ミッドウェー海戦

米Ⅱ空母「ヨークタウン」沈没

日Ⅱ空母「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」沈没

日Ⅱ陸軍北海支隊がアッツ島に上陸

7・16 日Ⅱ海軍設営隊がガダルカナル島に飛行場建設

に着手

8・5 ガダルカナル飛行場完成

米Ⅱガダルカナル島に上陸

8 第一次ソロモン海戦

米Ⅱ重巡洋艦「アストリア」「クインシー」「ヴンセンズ」沈没

重巡洋艦「シカゴ」大破

豪Ⅱ重巡洋艦「キャンベラ」沈没

日Ⅱ重巡洋艦「加古」沈没、「鳥海」「青葉」小破

ツラギ島の日本軍守備隊が玉砕

日Ⅱ一木支隊主力がガダルカナル島に上陸

日Ⅱ一木支隊主力が全滅

24 第二次ソロモン海戦

日Ⅱガダルカナル島に一木支隊第二梯団と川口支隊が上陸

9・3 日Ⅱタワラ島を占拠

8 米Ⅱガダルカナル島イボ岬に上陸

9 日Ⅱ伊号第二十五潜水艦が搭載機でアメリカ西海岸を爆撃

12 日Ⅱ川口支隊、ガダルカナル島飛行場奪還攻撃に失敗

- 25 日…ニューギニア島プアからブナに撤退
26 日…ガダルカナル島日本軍に物資輸送開始
10・11 サボ沖海戦
米Ⅱ重巡洋艦「ソルトレイク・シテイ」大破
日Ⅱ重巡洋艦「青葉」「古鷹」沈没
23 日…大本営がガダルカナル島第二師団長・川口少将を罷免
24 日…ガダルカナル島総攻撃
26 南太平洋海戦
米Ⅱ空母「ホーネット」沈没
空母「エンタープライズ」大破
日Ⅱ空母「翔鶴」「瑞鳳」大破
11・12 第三次ソロモン海戦（～5日）
米Ⅱ戦艦「サウスダコタ」大破
軽巡洋艦「アトランタ」沈没
日本艦隊Ⅱ戦艦「比叡」「霧島」沈没
16 日…大本営、ガダルカナル島第十七軍に持久戦を指示
28 日…大本営、ガダルカナル島撤退を決定
30 ルンガ沖海戦

この期間、日本帝国海軍は空母四隻、戦艦二隻、重巡洋

艦三隻を失った。これに対してアメリカ太平洋艦隊が失ったのは空母二隻、重巡洋艦三隻で、損害は日本がやや大きかった。だが残存の主力を見ると、日本は空母六隻、戦艦十一隻を保有していたのに対し、アメリカは空母二隻に過ぎなかった。

アメリカ太平洋艦隊の戦艦の多くはやつと真珠湾から引き揚げられ、大車輪で修理が行われている最中だった。航空兵力においてアメリカは増産に次ぐ増産を続け、ようやく日本軍との差を縮めていた。陸海空、ほぼ互角である。

二

何が戦局の転換を促したかという点、生産力である。この年八月十五日付け『機密戦争日誌』はこう記す。

物的困窮に立ち入れる陸軍省は遂に独逸より鉄一〇〇万トン、船五〇万トン購入申込みを議するに至る。窮通か、番町皿屋敷のお化けか。

これを理解するには若干の——風が吹けば桶屋が儲かる的な説明がいる。

第二次大戦は、鉄の戦いであった。鉄がなければ戦争の

経営が覚束なかった。

四二年度の粗鋼生産量は四百二十七万トンが見込まれていた。それは前年度に輸入された鉄鉱石の量から割り出された。しからば来年度はどうであるかというと、鉄鉱石の輸入量が激減したために、内閣企画院がはじき出した数字は三百万トンだった。三〇％の減少である。

原因は輸送船舶の逼迫であった。

日米開戦の四一年十二月時点で、日本が保有していた輸送船舶の総排水量は六百三十万トンだった。このうち百八十万トンを海軍が、二百十万トンを陸軍が徴用し、残った二百四十万トンが国内産業に振り向けられた。

「粗鋼の生産を維持するには、さらに六十万トンの船舶が必要である」

と企画院は言った。鉄鉱石を輸入しなければならない。

一九四一年十二月から四二年三月までの間に、十二万七千トンが純増した。日本は連合国軍から拿捕した艦船を哨戒艇に援用し、沈没・座礁した船を浮揚・修理し、懸命に新造した。その結果、この期間は喪失を穴埋めすることができた。

ところが四二年四月から、船舶の損失が急カーブで上昇した。アメリカの潜水艦は、日本の補給船を狙い撃ちにした。戦争資源を絶つ、という作戦である。この戦法はナチ

ス・ドイツが編み出した。

さらに日本は、ガダルカナル島への物資補給で多くの船舶を失った。その要因はアメリカ艦隊の砲撃ではなく、張り巡らした無線通信網、暗号の解析、潜水艦の活躍に依っていた。

一九四二年四月から四三年三月までに日本が獲得した船舶は、拿捕・浮揚修理三十七万七千トン、新造三十六万二千トンの計七十三万九千トンだった。ところが喪失は百二十五万トンに達し、差し引き五十一万一千トンの純減である。結果、戦地に兵力を送ることや、南方で得た鉱物資源を運搬することがままならなくなった。

粗鋼生産を維持するには六十万トン相当の船舶を確保しなければならない。しかし原料の輸送に船舶を回せば、戦場への物資輸送が滞る。

「来年度の装甲の生産量は三百万トンに減少する」

こう聞いたとき、陸軍参謀本部は

「ばかを言うな」と気色ばんだ。

「最低でも三百五十万トンは要る」

と叫ぶ陸軍に対して企画院は答えた。

「それなら全ての船舶を物資の輸送に割り当てなければならぬ」

「ばかを言うな」

参謀本部は別の意味で同じ言葉を吐いた。

このとき参謀本部は、一方で船舶の増徴を要求していた。「十二月五日までに二十四万トン。さらに作戦遂行用に九万五千トン、来年三月までに損害補填用として十六万五千トンがほしい」

合計五十万トンである。

「ばかなことを言うな」

と言ったのは、今度は軍需省だった。そんなにも陸軍に船を持っていかれたら、鉄も石油も手に入らなくなる。

この堂々巡りの中で、ナチス・ドイツに頼み込もうという話が出た。

だが、それはほとんど空想ないし漫画に近い。ナチス・ドイツはイギリスへの渡洋爆撃とロシア戦線を維持するのに精一杯だったし、加えてフランス、ベルギー、オランダなどでパルチザンのゲリラ攻撃に手を焼いていた。だけでなく、どのような手段で運ぶのか。

三

陸軍参謀本部が船舶三十五万トンの増徴に固執したのは、ガダルカナル島に送り込んだ三万五千人の将兵のためだった。戦いを維持するには大量の物資を補給し続けなければ

ならない。

三万五千人が一日に八百七十五グラムの食糧を消費するとして、毎日、約三十一トンの食糧を運ばなければならない。そのほかに兵器、砲弾、燃料が要る。これをまかなうには排水量にして数万トンに相当する船舶が要るであろう。このとき最も頭を痛めていたのは東条英機であつたらう。彼は第二次組閣で内閣総理大臣であつたばかりでなく、外務、陸軍、軍需の三省の大臣を兼ねていた。陸軍大臣の立場では参謀本部が要求する船舶三十五万トンの増徴を認めるべきだったが、軍需大臣の立場では鉄鋼三百五十万トンの生産確保を優先しなければならない。

それはどう考えても二律背反というものだった。逆立ちしても解決策は出てこない。そのために東条は、内閣総理大臣として決断することができなかった。

東条の意を受けたのは、陸軍省の軍務局長・佐藤賢了である。

一九三八年三月に行われた国家総動員法の審議に際して、議員の野次に「黙れ!」と発言して問題になった。一九三九年、第二十一軍参謀副長(大佐)、四〇年南支那方面軍参謀副長を経て、この年の四月、軍務局長に就任していた。東条腹心の一人といつていい。

この佐藤が参謀本部に出向いて、

「陸軍に船を譲ると鉄の生産は二百万トンに落ちる」と告げた。

同じ陸軍省の中で意見が真つ二つに割れていた。

「ばかを言うな」参謀本部は怒った。

『機密戦争日誌』十月三十日付

陸軍省軍務局長曰く、①来年度鉄三五〇万トンは絶対確保するを要す、②右保持困難なるが如き作戦は御免蒙る。意中言外に「ガ」島作戦の中止を要求するが如し。

鉄か船か、原料か物資かで大本営が割れている中で、戦争は待ったなしで進んでいた。にもかかわらず、東京では十二月に入っても、船舶の割当てをめぐる意見の対立が収まっていなかった。

十二月五日、東条は臨時閣議を招集した。船舶割当問題に決着をつけるためだった。

その席で東条は言った。

「陸軍に二十四万トンの増徴を認める。九万五千トンの追加徴用も認める」

ここまではよかった。

「ただし、損害補填用は八万五千トンとする」

この決定に参謀本部は激怒した。

『機密戦争日誌』十二月五日付

次長とくに第一部長激怒。無法の統帥干渉、傲慢無礼の閣議決定に至る間に於ける陸軍大臣の態度に対し、嫌き足らずものあり。次長官舎に軍務局長を招致して事情を聴取、激論あり。

第一部長激昂して軍務局長の間に夫々二つずつの鉄拳飛ぶ。軍務局長の反撃冷静なるものあり。種村は軍務局長をして其席を去らしむ。

次官官舎に至り、次官、局長に対し、第一部長より色々説明、陸軍省の善処を要望するところあり。

激論数刻、午前三時に至るも遂にまとまらず、此の間第一部長、大臣との面会を強要するも、陸軍大臣の消息不明を理由として面接せしめず。

翌日、田辺、田中らは陸軍大臣としての東条に面会を強要して、再び激論となった。

このとき田中が激昂して、東条を

「バカヤロウ」

と罵倒した。

東条は内閣総理大臣でもある。

戦争運営の中枢が混乱・分断するなか、大本営は一九四

二年十二月三十一日にガダルカナル島からの撤退を決定、翌四三年二月一日から撤退開始、七日完了までの間、日本の船舶による輸送力は排水量に換算して七万七千トンが失われた。四月十八日、ソロモン上空で連合艦隊司令長官・山本五十六が戦死した。第六十六

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**アッツ島** アリユーシャン列島の島で、一九四二年六月、ミッドウェー作戦に呼応して①哨戒線の前進②米ソ連絡網の遮断③アメリカ軍による航空基地利用の阻止——などを目的に、陸軍北海支隊と海軍北方部隊が上陸し占拠した。しかしミッドウェー作戦で連合艦隊が敗北したことにより、アリユーシャン列島の戦略的な価値が無くなった。米軍の反攻が強まる中で大本営はアッツ島とキスカ島を無策のまま放置することになった。

一九四三年五月十二日、アメリカ軍は戦艦三、空母一、重巡三、軽巡三、駆逐艦十二の艦隊が支援して第七歩兵師団一万一千人をアッツ島に上陸せしめ、北海守備第二地区部隊二千六百五十人と激戦が展開された。五月二十九日、日本守備隊の残存三百人は山崎保代陸軍大佐ともども玉砕した。

**山崎保代**・やまさき・やすよ／1891～1943。山梨県都留郡禾生村に生まれ、一九一三年陸軍士官学校を出た。四〇年三月歩兵大佐に昇進して歩兵第一三〇連隊長、四三年二月潜水艦「伊三二」でアッツ島に着任した。玉砕後、二階級特進して中将となった。

**ツラギ島** 旧ソロモン王国の故地で、ガダルカナル島の向かいにある。一九四二年五月に日本軍が占拠し、三か月後の八月八日にアメリカ軍の攻撃によって守備隊が玉砕した。同島の東側にあるガブツ島とタナンボゴ島は日本軍航空隊の水上機の基地で、ツラギ島と同時にアメリカ軍が奪回した。ツラギ、ガブツ、タナンボゴ三島の日本軍守備隊は約千百人だったが、生存者はわずか三人

だった。駆逐艦「菊月」と輸送船「第三利丸」が座礁したまま放置されている。

**タラワ島** イギリスの植民地だったが日本軍の上陸によって独立し、現在はキリバス共和国となっている。日本軍はこの島に陸上局地戦闘機「隼」、九七式攻撃機を配備していて、上陸してくるアメリカ軍におおきな損害を与え、一度は撃退することに成功した。アメリカ軍にとつてのウェーキ島に等しい。四三年十一月二十一日早朝に始まった陸戦は二十三日夜に集結した。日本軍の戦死は四千七百十三人、生存は百六十人、アメリカ軍の戦死は一千九人、戦傷は二千二百九十六人だった。

## 067 ランチェスターの法則

第六十七

ランチエスターの法則

一

ミッドウェー海戦の大敗をきっかけに、大本営は冷静さを失い始めた。

この言い方に対する異論・反論はもちろんある。

アメリカの空母を艦隊決戦におびき出して壊滅し、ミッドウェー島を不沈空母としてハワイ、アメリカ本土を空爆するという山本五十六の大構想に、当時の大本営海軍部は反対だった、という説である。

大本営は冷静だったが、山本は「この作戦が通らなければ連合艦隊長官を辞める」とねじ込んだ、というのである。そうであったかもしれないが、最終的に大本営はMI作戦を許可した。

代案がなかったということだし、その裏で陸軍の一幹部が首相に「バカヤロウ」の罵声を浴びせるような状況があった。冷静だった、と言えるかどうか。

船舶を資源の運搬に回して鉄の生産に充てるべきか、物

資や兵器・弾薬の輸送に用いるべきかは難しい選択だったかもしれないが、その議論に半年近くもの時間を費やしたのでは話にならない。この間の停滞が、戦局のムードを一変させた。追い上げ、追いつき、反撃に出る方が強い。

アメリカ軍はこの間に、部隊を入れ替えていた。

例えば焦眉の的だったガダルカナル島では、七月二十一日の上陸から激戦を戦ってきた第一海兵師団がようやく疲弊し、第二海兵師団一万四千七百三十三人、第二十五歩兵師団一万二千六百二十九人の新鋭部隊に交替した。戦車、水陸両用車輛、無線電話などが空輸され、兵士はM1ガーランド銃かM1カービン銃を装備していた。

大日本帝国陸軍の歩兵が装備していたのは一九〇五年（明治三十八）に制式採用された「三八式歩兵銃」である。元込め式で弾丸五発を弾倉できた。一九四一年末までに改良が加えられ、五発を一セットにした挿弾子を装填でき、歩兵一人当り百二十発の弾丸を携行した。

これに対してM1ガーランド銃は八発の挿弾子を装填でき、M1カービン銃は十五発弾倉で連射が可能だった。単純計算でアメリカ軍の破壊力は日本軍の倍を上回っていた。

おまけに日本軍から奪取した飛行場は、戦車を改良したブルドーザーで短期間に整備・拡張され、大型輸送機の離



着陸が可能になった。その周辺に兵舎が建ち並び、病院をはじめバーや野外映画館までがしつらえられた。

以後のサイパン島、硫黄島、沖縄などでも同様だったが、アメリカ軍は橋頭堡として一定の面積を確保すると、まず船でブルドーザーと鉄の板を運び込んだ。ブルドーザーで樹木をなぎ倒し、土地を均し、そこに鉄の板を敷き詰める。

飛行機が離着陸できれば、大型の機甲車輛と火砲、歩兵、物資などを送り込むことができる。そういうシステムができていた。

ジャングルの何百か所に鉄条網が備えられた。鉄条網には手榴弾が仕掛けられ、その手榴弾にはワイヤーが結び付けられた。日本兵が近づいてワイヤーに足を引っ掛けると手榴弾が爆発する。その爆発音を頼りに日本兵を追撃する仕掛けだった。

しばらくすると手榴弾の代わりにマイクがしつらえられた。マイクを通じて機銃掃射やアメリカ兵の会話、車両のエンジン音などを流す。それに日本兵が応射するのを待つ。さらに無人となった家屋に食糧と水を用意した。その周りに一個小隊を配備し、日本兵が食糧や水を盗みにきたところを一斉射撃で斃す。

こうしたいくつもの罠のために、日本兵はむざむざと命を失っていた。

そればかりではなかった。

アメリカ軍は「情報」の収集と活用で日本軍を凌駕した。ガダルカナル島では、占領した日本軍の基地の燃えかすの中から、日本語の日記を日系二世の海兵隊員が解読した。彼ら日系二世の海兵隊員の中には、日の丸の鉢巻を締めて日本軍と戦う者もいた。アメリカ本土で暮らす父母や兄弟の名譽がかかっていた。

日記に記されている出来事からアメリカ軍が割り出したのは、日本軍の士気や補給の状況だけではなかった。そこには日本の地名、方言、習慣に関する情報が記録されていた。

わたしたちは意識することなく、自身の出身地を語っているものである。アメリカ軍はジャングルの奥に潜む日本軍の出身地を割り出した。日本の陸軍が県単位で編成されていることを知っていたのである。

所属師団を割り出し、その兵力を察知した。こうした情報は一元的に集約され、日本軍が太平洋にどのよう兵力を配置しているかを知る手がかりとなった。

個別の局面でいえば、兵員の気質——粘り強いのか、猪突猛進か、合理性を重視するか、など——を勘案して戦術を組み、投降し、あるいは捕らえた日本人捕虜を尋問する際、東北弁、関西弁、四国弁、九州弁が話せる日系二世を当て、

故郷の話聞きだすことから心を開かせることも可能になった。

前線に配備された計算機は、最前線の部隊から送られてくる様々な情報を、その場で分析することができた。ある場合は暗号であったり、ある場合は占領したナチス・ドイツやイタリアや日本の前線基地の糞尿だったりした。

いささか尾籠な話だが、アメリカ軍は敵軍が残した糞尿の量から、兵員の数を推測し、作戦をシミュレーションしようとした。戦場に配置された計算機が、数値を算出したことはいを待たない。

第二次大戦は、戦闘を計数化した初めての戦争だったということができる。

## 二

戦闘を計数化する、とはどういうことか。

ナチス・ドイツ、ファシスト・イタリア、大日本帝国の枢軸三国との戦争が現実のものになりつつあった一九四〇年、アメリカ合衆国大統領ルーズベルトはコロンビア大学の数学教授チャリング・タープマン、プリンストン大学のフィリップ・モースといった数学者を集めて、キムボール海軍作戦研究班に特別プロジェクトを編成した。

プロジェクトチームに課せられたのは「ランチェスターの法則」(Lanchester's laws)の実践的研究だった。

「ランチェスターの法則」は、現在はビジネス上の戦略を策定するときの基本原理と受け止められている。経営コンサルタント会社などが研修講座で行う「ビジネス・ゲーム」は、大半がこの法則をモデル化したものといっている。——ビジネスも戦いの一種である。

という認識に立つてのことだが、この法則の特徴は不特定条件ないし複数の条件が重なり合ったとき、最も適切な判断を導き出すことにある。それは変化が激しければ激しいほど、弱者と強者の条件を特定することができない、という観点から戦略をとらえようとしていることだ。

それまで圧倒的な強者として君臨していた企業でも、市場そのものが縮小してしまえば弱者になってしまう。そこで、現状把握と将来予測、周辺の動向などを考慮し、「弱者の戦略」か「強者の戦略」のいずれかを採用すべきであるという。

この法則は、イギリスの航空工学技術者で、のちに英国学士院会員、法学博士、王立航空協会名誉会員となったフレデリック・ウイリアム・ランチェスターが、第一次大戦中に行われた空中戦のデータを解析する中から一九一四年に発見したといわれている。

ランチエスターは有名な大学で専門的に統計学や経営学を学んだわけではなかった。最初、ガス会社に入り、ガソリンエンジンの設計と製作に携わった。一八九二年、二十四歳の時に自分が設計したエンジンを自動車に搭載して走らせることに成功した。

彼は一躍、「イギリス初のガソリンエンジン自動車の開発者」として知られることになった。それをきっかけに自動車会社を設立し、「ランチエスター・カー」を製造・販売したが、事業としてはパツとせず、飛行艇製造会社の技術コンサルタントを経て、一九一三年に「ランチエスター研究所」を設立した。

翌年、四十五歳のとき、雑誌に連載を始めた。「飛行機は今後、戦争にどう使われ、戦争をどう変えていくか」という内容で、それは第一次大戦のときの航空機の戦いを分析したものだ。

その中で、理論の原型となる論文二編を発表したのである。

法則の第一は「一騎打ちの法則」と呼ばれる。

中世的な戦争は一对一の戦いを中心なので、敵味方の力量が同等であれば、数の多い方が勝つ。戦闘は一对一で相殺されつつ進行するため、あぶれた兵力は戦闘できずに余ってしまいが、相手がすべて倒れたとき一人でも残ってい

れば戦いに勝利することができる。

将棋の「歩」を使って行う「はさみ将棋」という遊びを考えればいい。対戦者が交互に一手ずつ指す。相手の駒に前と後、左と右を挟まれた駒は盤上から取り除かれる。

理屈で言えば相互に駒を一つずつ失い、最後に三対二の戦いになる。ところが実際には、交互に一駒ずつ失うわけではない。それが作戦の妙であり、見落しとの痛いところだ。

ところが近代戦争は違う。

銃や大砲といった飛び道具、戦車や戦闘機などが登場した第一次大戦を契機に、戦争は数の理論から質の理論に転換した、と彼は結論づけた。戦闘は一对 $n$ で行われ、仮に味方の数が敵より少なくとも、敵に集中的に損害を与えることができる。

これは本将棋を使うとうまく説明がつく。

相手の「玉」に味方の駒を殺到させればいいのである。相手の「玉」の行きどころを封じてしまえば勝負がつく。相手にいくら駒を渡しても構わない。どうせ一手で一駒しか使えないのだ。

将棋の駒の働きにはルールがあって、「歩」が「桂馬」を守り、「桂馬」と「香車」が逃げ道を封じ、遠くから龍と馬が睨みを利かせればいい。また味方の数が敵より多い

場合、それぞれがあぶれることなく戦闘に参加できるように、多面展開を行えばいい。

太平洋戦争の後半にいたってアメリカ軍が取った作戦がこれだった。南方から北上する陸軍第六、第八軍、中部太平洋から西進する太平洋艦隊と海兵師団のために、日本軍は兵力を散開させざるを得なかった。これを「集中効果」といい、物量は「多面展開」であった。

### 三

いわれてみればその通りで、理論としては単純なものだった。ランチェスター自身も、雑誌に書いた自分の論文が近代戦争の基礎理論として重宝がられるようになるとは考えもつかなかった。

一方、軍艦や航空機、戦車、銃砲の数量だけを重視していた軍当局者、政治家たちにとって、「集中効果の法則」と「多面展開のルール」は革新的な理論にはかならなかった。

問題なのは、いかにすれば「集中効果」をあげることができるか、だった。すなわち、兵器の性能と兵力のバランスをどのように最適化するかである。

キムボール海軍作戦研究室（班から室に昇格）は、戦闘

力

——「戦略力」と「戦術力」に分けて考えるべきである。という結論に到達した。

さらにコロンビア大学のクープマンは、全戦闘力の何割を「戦略力」に、何割を「戦術力」に配分するかという、「戦闘力配分の法則」を発見した。それはこんにち「クープマンの法則」として知られている。

最小の損害で最大の戦果を上げるには、全戦闘力の三分の二を「戦略力」に、三分の一を「戦術力」に配分するべきであるというものだった。敵地を爆撃する場合、味方の爆撃機の損害を無限にゼロに近づけるには、迎撃する敵の戦闘機の製造能力を無限にゼロに近づければいい。

つまり、戦闘機を製造している工場や補給網を徹底的に破壊してしまえば、味方の損害は限りなくゼロに近づく。これが「戦略爆撃」の原理となった。アメリカ軍が大型爆撃機B-29をもつて執拗に日本本土の工業地帯を爆撃したのは、クープマンの法則に基づいていた。

一方、大統領ルーズベルトや国務長官ハルなどが頭を悩ませていたのは、アメリカ陸海空軍が主張する兵器や装備の優先度と財政の問題だった。彼らの評価に任せる限り、客観的なプライオリティが確定できず、軍事費は天井知らずに膨張する。軍は軍需産業と密接な関係にあって、上乗

せした軍事予算をめぐって陣取り競争をしているに過ぎないのだ。

そこで専門の研究チームが構成され、どのような状況が想定されるか、その場合にどのような作戦を立て、どのような兵器が敵に最大のダメージを与えるかを研究することになった。戦略のシミュレーションであり、OR（オペレーションズ・リサーチ）の始まりとなった。

プロジェクトチームの数学者たちは、陸海空軍の作戦立案担当官や現場の指揮官などから、様々な戦闘の想定をヒアリングした。その結果、双方が同じ力量であれば、一の敵を打ち負かすには三の攻撃力が必要であることを発見した。さらに全兵力の一分が戦死や戦傷で戦線から離脱すると、組織的な戦闘能力が大幅に失われることを見出した。

また「弱者の戦い方」として、

- ・ 局地戦を選ぶ
- ・ 接近戦にもちこむ
- ・ 兵力を一点集中させ陽動作戦をとる

といった、具体的な戦術ルールを編み出した。

次いで、「強者の戦い方」では、

・ なるべく確率戦にもちこむ

・ 総合戦を展開する

・ 遠隔的戦闘にもちこむ

・ 短期決戦をねらう

等々の戦術ルールが確立されていった。

さらにプロジェクトチームは、当初の想定に入っていないかった結論を出した。

「重要なのは補給である」

というのである。

兵士の訓練度、組織の統率力、兵器の性能などがほぼ拮抗している場合、勝者になるには潤沢な物資と、その適切な補給が決め手になる、というのである。ここに「補給」という新しい概念が誕生した。その基礎的要素とは、

一、実際の戦闘は、兵力の消耗と補給によって展開される。

一、敵味方双方の兵器は絶えず生産され、絶えず改善の努力が行われる。

一、前線の戦闘力は後方補給力によって左右される。

というものだった。「ランチェスター戦略モデル」と呼

ばれるのがそれである。

プロジェクトチームはそれだけにとどまらず、複雑な計算式を作り上げた。

アメリカ政府は第二次大戦を、大きな事業の運営と同じ視点でとらえようとしていた。計数的経営の発想が、戦争に適用されていた。ここで計算機の重要性が浮上してきた。IBM社からの提案をルーズベルトが受け入れたのは、こうした下地があったからだった。

加えて陸軍はレミントンランド社に、海軍はIBM社に、連邦政府は主要な工科系大学に、それぞれ計数処理に適した新型計算機の開発を発注した。国を挙げての計算機開発競争が始まった。

レミントンランド社とIBM社の新型計算機は第二次大戦には間に合わなかった。だが、その成果は一九四五年以後、相次いで実用化されていく。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

挿弾子 防衛省の説明には「弾倉への装弾を容易にするために用いる弾薬の保持具」とある。挿弾子を用いると、手で一発ずつ装填するより素早く再装填が行える。

M1ガーランド銃 一九三二年に開発された初の自動小銃で、弾丸八発を装弾することができた。弾丸を発射した後の薬莖除去と弾丸装填を自動的に行う機構を備えたが、大量の火薬を消費するデメリットがあった。このため輸送力と兵站管理力が必須だった。**M1カービン銃** 一九四一年に開発され、ほぼ同時に制式採用された。

チャリング・クープマン Tjalling Charles Koopmans／1910～1985。

フレデリック・ウィリアム・ランチェスター Frederick William Lanchester／1868～1946。

068 寂寥

第六十八

寂寥

一

ミッドウェー海戦を境にアメリカ軍の劣勢挽回に勢いがついたのは事実だった。しかしアメリカ軍は、この時点ではまだ

——優勢になった。

とは判断していなかった。

対して日本軍、とくに海軍は意気消沈し、次善の策を講じることすらできなかった。山本五十六が乾坤一擲の総兵力で臨んだ艦隊決戦に、戦艦や重巡洋艦などが参加しないまま、主力空母の半数を失ってしまった。そのショックがあまりにも強烈だったのだ。

海戦に参加した将兵には緘口令がひかれ、他の部隊より優先的に激戦地に送り込まれた。日本の大本営は緘口令のうえ、口封じをした。

『機密戦争日誌』七月十三日付

近来戦争指導活発化せず。ミッドウェー以来、海軍の海軍本位的威勢よき積極論を聞かざるも亦寂寥。

一方、パプアニューギニアのポートモレスビー攻略作戦は着々と進められていた。六月十六日、ガダルカナル島に連合艦隊の第十一設営隊、七月一日に第十三設営隊が上陸して、ルンガ川のほとりに飛行場を建設し始めた。これに對してアメリカ軍は陸海軍共同によるソロモン諸島奪還を計画し、七月十日に「ペスト」と名づけた作戦を発動した。八月七日、ガダルカナル島に向けて最初のアメリカ軍部隊が発進した。当初予定された攻撃部隊第一海兵師団の兵力は一万九千人だったが、一個連隊をサモア島に振り向けられ、実質的には二個連隊に過ぎず、これをツラギ島とガダルカナル島に分けると、それぞれに上陸させるのは一個連隊に過ぎなくなる。

しかも兵装は旧式で、アメリカ本土から三週間前に到着した新兵が中心だった。つまり、訓練を十分に受けていない緒隊の寄せ集めだった。本気で反攻基地を確保しようとしたのでなく、いわば日本軍の出方を探るための武力偵察に近い。

ガダルカナル島の日本軍守備隊（約二千四百人）は、それを「アメリカ軍の反攻」と早合点し、ジャングルの中に

逃げ込んでしまった。反対にツラギ守備隊七百人は上陸してきた六千人のアメリカ陸戦隊に真正面からぶつかり、捕虜二十三人を出して全滅してしまった。

「ランチェスター戦略モデル」をもつてすれば、ガダルカナル島の日本軍守備隊は水際で粘り強く戦い、ツラギ島守備隊はゲリラ戦に持ち込むべきだった。

同日午前十時半に、「ペスト」作戦を展開中の第一海兵師団通信部は

——STOより。二十四機の雷爆撃機、貴地に向かう。という通報を得た。

STOというのは、太平洋の島々にアメリカ軍が配置した監視員の符号である。

この通信はボルネオ島のポートモレスビーで受信され、タウンズビル（オーストラリア）↓キャンベラ↓ハワイのルートでアメリカ海軍太平洋艦隊司令部に届けられた。

太平洋艦隊司令部はただちにガダルカナル沖に遊弋中のオーストラリア海軍重巡洋艦「キャンベラ」に緊急を知らせ、艦隊は戦闘準備を整えることができた。

飛来した日本の陸上攻撃機二十七機のうち五機、艦上爆撃機九機のうち五機、零戦十七機のうち二機が、翌日も同じ方法で陸上攻撃機二十三機のうち十八機、零戦二十五機のうち二機が、それぞれ撃墜されている。

この通信網は以後も継続して活用され、日本の航空機は出撃するたびに的確な迎撃機や対空砲火に遭遇して大きな損害を出した。これに対して日本軍は、事前に迎撃機が舞い上がっている、高度の違いから侵入する連合軍機を見逃し、陸上施設や艦船への爆撃を許している。

以後のガダルカナル島の戦いを詳述するのは、本書の目的ではない。概略をいえば、アメリカ軍の物資陸揚げ中に日本艦船が襲撃した第一次ソロモン海戦は日本軍が勝った。このとき陸軍参謀本部は「ガ島に人質を取った」と喜んだ。ところが上陸した一木支隊、第三十五旅団の攻撃が失敗した。陸上部隊を救援するために出向いた艦隊がアメリカ空軍と潜水艦によって沈められた。何度試みても結果は同じだった。

三万五千人の兵士が孤立した。人質を取られたのは日本軍だった。

二

『機密戦争日誌』はこの間、次のように記す。

九月十日付

海軍勝手な作戦而も拙劣なる作戦をやり不経済油の使用

をやり今更油が足りぬ故民需特配を中止するが如きは無責任も甚だし。海軍も充分右責任を感じある如きも、現実には石油なきを如何せん。ソロモン海戦尚逆睹し難く連合艦隊主力未だラホールにある現状に於いて特に然るべし。海軍今日の苦境すべてミッドウェー海戦に起因す。

十月二十六日付

ソロモン方面陸軍戦況全く頓挫せり。然るところ海軍作戦は意外進展しありて同慶に堪えず。第一部長、開戦以来未だ嘗てなき屈辱を感じと述懐せらる。総長の陛下に対し奉る心中をお察しし陸軍統帥部の苦衷言わん方なし。

大本営は、適切な戦局の分析ができていなかった。情報の客観的な分析と、様々な条件のもとの柔軟な作戦の変更に対応する機能が、日本軍には欠けていた。また繰り返しになるが、物資の輸送と補給の重要性に気がついていなかった。

インパール作戦でもそうだったように、日本陸軍の物資調達は現地主義が貫かれた。すなわち占拠した土地の物品を掠め奪い、武力をもって強奪し、駐屯先を耕し作物を得るのである。十五世紀のチンギス・ハンの戦法と少しも違う。

このためにガダルカナルでは物資の輸送に極端な消耗が強いられた。

一九四二年十一月二十五日から四三年一月三十日まで行われた日本軍による補給作戦は、駆逐艦六十九隻、潜水艦四十六隻などによって遂行されたが、送り込んだ食糧、弾薬、兵器など三千三百トンのうち、揚陸されたのは七百五十六トン、二二・九％に過ぎなかった。

七百五十六トンというのは決して小さな数字ではないが、このうち食糧は六百八十六トンであつて、同島に取り残された将兵二万八千人が二十八日間で食べつくしてしまう量なのである。そういった緻密な計算がないまま日本陸軍は次々に兵団を送り、自らの首を絞めた。それは「皇軍は不敗である」という過信と面子のゆえだった。

とはいえ、日本軍によるガダルカナル島の撤兵は太平洋戦史に残る名作戦とされている。

指揮を執ったのは連合艦隊の山本五十六長官だった。

彼は同島の将兵が救出地に集合するよう、味方に対する欺瞞作戦を実行した。航空機をもって同島のアメリカ軍基地を攻撃し、反攻に出るように思わせた。さらに現地の司令部に、

——新たに上陸させる兵団と合せて敵を挟撃するのである。

という偽の情報を流した。

彼は駆逐艦二十隻を二隊に分け、一隊を橋本信太郎少将に、もう一隊を小柳富次少将に委ねた。

救援隊はそれぞれ単艦回避運動距離一キロの間隔を置いて二列縦隊で進み、途中、アメリカ軍の航空機四十機が攻撃してきたが、上空を掩護していた零戦三十機がこれを撃墜し、次に繰り出してきた魚雷艇部隊を橋本少将麾下の駆逐艦が応戦して炎上させ、二月一日午後十一時に同島エスペランス岬の四百メートル沖合いに到達した。これによって五千四百十四人が救出された。

同様の方式で二月四日に第二次救出作戦が行われ、四千九百九十七人が収容された。第三回目の救出作戦をめぐって、アメリカ軍に察知されているかどうか、議論が分かれた。駆逐艦艦長が鳩首し、決行が決まった。

二月七日、第三次救出作戦が敢行され、二千六百三十九人が運び出された。

駆逐艦二十隻による作戦行動がアメリカ軍に知られなかったはずはなかった。彼らは日本軍の暗号を解読して十分な情報を手に入っていたが、太平洋艦隊の司令長官ニミッツは、山本長官の偽せ情報を信用した。つまり、日本軍は懲りずに、またぞろ大兵力をガダルカナル島に運んでいる、と思つたのだ。

——運べるだけ運ばせればいい。

と彼は考えた。

——日本の一個師団でもガダルカナル島に上陸してくれば、他の戦闘地域の脅威が減るであろう。このためアメリカ軍は日本の駆逐艦隊の行動を見て見ぬふりをした。

——頃合い。

と攻撃に出たアメリカ兵が見たのは、ゴミの山だった。

日本兵は一人も残っていないかった。

こうしてガダルカナル島はアメリカ軍の手中に落ちたが、なお、アメリカ軍は「優位」にはなかった。アッツ、マキン、タラワ、クエゼリン、ルオットといった諸島に日本軍の守備隊が頑張っていた。

戦況が一気にアメリカ軍有利に傾いたのは四四年六月以後である。欧州戦線で連合国軍がノルマンディ海岸に上陸してドイツ進攻の橋頭堡を築き、八月にパリが解放されたのだ。その結果、アメリカ軍は太平洋戦線にやや力を傾けることができるようになった。

三

アメリカ軍が日本軍の暗号をほとんど解読していたことは、戦後、明らかになっている。解読できるようになった

のは、外交文書については四一年四月から、軍事指令については四二年春ごろからであったとされる。

アメリカは日本が開発した暗号機とまったく同じ装置を作り出し、陸軍省と海軍省に二台ずつ、さらにロンドンに一台、フィリピン（フィリピン陥落後はオーストラリア）に一台を置いていた。日本がアメリカに宣戦を布告した際、駐米日本大使館の職員が暗号電を翻訳している間に、アメリカ政府は傍受した暗号をPCSにかけて解読してしまっていた。

また、連合艦隊司令長官・山本五十六が乗った海軍一式陸上攻撃機を撃墜したのも、暗号を解読した結果だった。開戦直後、ウェーク島海岸に沈没・着底した日本海軍駆逐艦「疾風」「如月」から発見した暗号書が決め手だった。

同じように、アメリカ太平洋艦隊は日本の連合艦隊司令部が四三年四月にトラックからラバウルに移ったこともつかんでいた。アメリカ軍にとって、ハワイ奇襲攻撃に始まる作戦指導力において、山本五十六は尊敬の対象であると同時に最大の標的でもあった。

——ヤマモトを排除することは、空母数隻を撃沈するのに等しい。

と彼らは考えた。

一九四三年の四月、山本長官は前線に展開する主要な日

本軍航空隊基地を訪問する計画を立てた。バレラ、ショールランド、ブインの基地を訪れ、士気を鼓舞するのである。この計画は四月十三日に東南方面艦隊第十一航艦司令長官草鹿任一中将の名で「作戦特別緊急電報」として各基地に打電された。

アメリカ軍もその電波をキャッチしていた。

四月十七日、アメリカ海軍のノックス長官は、太平洋方面総司令官ニミッツ大將に、

——ヤマモトを撃て。

という極秘電を発した。ニミッツ大將はその指令を機動部隊司令官ハルゼー中將に伝え、ハルゼーは基地航空隊司令官であるマーク・ミッチャー少將に命令を出した。ミッチャー少將はこの命令を受け、ガダルカナルのP-80戦闘機航空隊から十六人、第七十戦闘中隊から二人のパイロットを選び抜いた。指揮官はジョン・ミッチェル少佐である。

ミッチェル少佐はただちに作戦の立案に取りかかり、十八機を二手に分けることを考えた。

山本長官搭乗機には相当数の護衛機が付くであろう。そこで十四機が護衛機を攪乱している間に、あらかじめ飛行予定コース上に待ち受けた四機が山本長官搭乗機をねらう。必殺の一撃を加え、ただちに退去する。

同日、日本海軍航空基地は山本五十六連合艦隊司令長官の詳細な行動予定を暗号で交信した。この電波は、アリユーシヤン列島の米海軍無線基地で補足され、ハルゼー米南太平洋部隊司令官に報告された。それによると、

—— 山本長官は午前八時にラバウルを発し、同九時四十五分にパラレ基地到着の予定。

という。

翌十八日未明、ハルゼー中将はガダルカナル島のミッチャー少将に指示を与えた。

孔雀ハ時間通り行動スルモノト思ワレ
尻尾ヲ団扇デアオラレタシ

というものだった。

「孔雀」とは、すなわち山本五十六である。

四月十八日未明、ガダルカナル島のアメリカ軍基地から十八機のP-38が離陸した。うち二機が故障のため途中で引き返した。刺客は十六人に減った。

護衛の対象は二機の一式陸攻である。一機に山本五十六連合艦隊司令長官が、もう一機に宇垣纏参謀長が乗った。日本のラバウル航空基地は最初、零戦二十機で護衛する予定だった。ところが山本長官が、

「たかが護衛のために、大切な零戦をそんなに飛ばす必要はない」

と言った。

そこで護衛の零戦は六機に減らされた。

午前九時三十四分、山本連合艦隊司令長官を乗せた一式陸攻がブーゲンビル島上空にさしかかったとき、十六機のアメリカ軍機が襲いかかった。護衛が二十機であれば——と言っても、「覆水盆に返らず」のことわざがある。

山本長官が乗った一式陸攻に射撃を加えたのは、トーマス・ランフィアという大尉である。

アメリカ軍が「ライター」と呼んだように、防弾・防火装備を持たない一式陸攻は、あつという間に翼の付け根から火を吹いてジャングルに墜落した。

ただちに搜索隊が編成され、同日夕刻、山本五十六大將の死が確認された。

発見したのは歩兵第二十三連隊道路設営隊長・浜砂盈栄少尉だった。

軍刀ヲ左手ニテ握リ、右手ヲソレニ副エ、機体ト略々並行ニ頭部ヲ北ニ向ケ、左側ヲ下ニシタ姿勢デ居ラレマシタ。御遺骸ノ下ニハ座席クツシヨシヲ敷キ、少シモ焼ケテハ居ラレマセンデシタガ、左胸部ニ敵弾ガ当ッタモノノ様デ血

ガ流レテ居リマシタ。他ノ方ノ遺骸ハ全部腐敗シテ、殆ド
全身ニ蛆ガ湧イテ居リマシタガ、御遺骸ノミハ僅カニ口ト
鼻ノ付近ニ蛆ガ湧イテイル程度デアリマシタ。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**ソロモン海戦** ソロモン海はニューギニア島東部からオーストラリア北部の珊瑚海につながり、ソロモン諸島とニューカレドニア島、フィジー島などで囲まれる海域。ガダルカナル島における陸戦に関連して、日本軍と米・豪連合軍が三度にわたって戦った。第一次・一九四二年八月八・九日。サボ沖海戦、ツラギ夜襲戦とも呼ばれる。オーストラリアの重巡洋艦キャンベラ、アメリカの重巡洋艦アストリア、クインシー、ヴィンセンスを撃沈し、重巡洋艦シカゴ、駆逐艦ラルフ・タルボット、バターソンが大破するなど日本軍の勝利となった。

第二次・一九四二年八月二十四日。この海戦のあと同年十月十三日、日本海軍の戦艦金剛、榛名などがヘンダーソン飛行場を艦砲射撃で攻撃した。

第三次・一九四二年十一月十二・十五日。ガダルカナル島に上陸した日本陸軍第三十八師団への物資補給を阻止しようとした米豪連合軍によって、日本海軍が惨敗を喫した。輸送船十一隻約七万七千トンを喪失したことにより、陸軍は民間船舶の追加徴用に動くことになった。

#### ノルマンディ海岸 Normandie

ドーバー海峡のフランス側、ル・アーブルとカーンの間にある海岸で、連合国軍の反攻上陸作戦が行われた。映画『地上最大の作戦』で知られる。ここが反攻上陸作戦に選ばれたのは近くにあるコタンタン半島のシュールブル港が物資補給の拠点として適していたこと、海岸から内陸まで平坦な土地が続いていることなどだ

った。

ついながら、この地名はノルウェー王室からイングラランド王室に嫁いだ王妃の子孫が「ノルマンディ公」と称され、英仏百年戦争のときフランスに上陸して占領し、わが領地としたことに始まる。

**海軍一式陸上攻撃機** 九六式陸上攻撃機の燃料タンクをインテグラル・タンク式に改良して航続距離を延ばした。インテグラル・タンクというのは翼を密閉してそこに六千リットルの燃料を注入するものだった。このため翼に被弾するとたちまち火災が発生し、あるいは爆発した。アメリカ軍はその弱点を見抜いて翼の付け根に照準を合わせた。一撃ですぐに火がつくことから「ワンシヨット・ライター」と呼ばれた。

**P-38 戦闘機** 通称は「ライトニング」(稲妻)。ロッキード社が設計・開発した双胴型高速戦闘機で、一九三九年に米陸軍に制式採用された。二基のエンジンを搭載し最高速度六六〇キロ/時、航続距離四〇〇〇キロ、搭載できる爆弾は最大九〇〇キログラムだった。空中戦では日本の零戦に敵わなかったが、防御性能と破壊力が高く評価され、ヨーロッパ戦線でも使用された。『星の王子さま』の著者であるサン・テグジュペリが偵察任務で用いていたことでも知られる。

**山本五十六の死** その死は一か月以上秘匿され、五月二十一日にようやく大本営が発表した。同年六月五日、東京・日比谷公園で国葬が行われた。護衛の使命を果たせなかった六人はその後、激戦の最前線に送り込まれて五人が戦死、右手首を失って退役した一人のみが生き残った。



069 V T 信管

第六十九

V T 信管

一

ガダルカナル島から日本軍の撤収が完了した（とされる）  
一か月後の一九四三年三月十二日、アメリカ統合参謀本部  
主催の太平洋軍事会議で「エレクトロン作戦」が採択された。  
戦争の運営にかかる中長期の基本方針という意味なので、  
こんなにち的に言えば「戦略」と表記すれば分かりが早い。

ガダルカナル島を制圧したことで、連合国軍は勝利の手  
応えを確実にした。その前段階として、四二年八月から九  
月にかけて、アメリカ陸海軍・政府首脳は太平洋の戦いに  
かかる「レインボー計画」、日本を占領・支配する「ダウ  
ンフォール作戦」を立てていた。

このうち「レインボー計画」は海軍省のアーネスト・キ  
ング作戦部長が提唱したもので、ハワイを拠点として、中  
部太平洋のサモア↓ギルバート諸島↓マーシャル群島↓ト  
ラック↓グアムと太平洋上の島々をしらみつぶしに制圧し、  
日本本土に上陸して首都・東京を占領するというものだった。

た。これが実施されていたら、平塚から藤沢にかけての湘  
南海岸は、欧州戦線におけるノルマンディ海岸になっていた。  
た。

しかし状況が変わった。

海軍の現場で戦争指揮に当たっている第三艦隊司令長官  
のハルゼー、太平洋艦隊司令長官のニミッツ、第十六任務  
部隊司令官のスプルーアンスといった諸将が反対した。

ガダルカナル島の戦いとソロモン海戦で連合国軍は制空  
権と制海権を手中にした。太平洋上の島々を占拠している  
日本軍は放っておけない。補給がなくなれば立ち枯れる  
であろう、というのである。

だけでなく、ボーイング社の開発による空の要塞「B-  
29 スーパーフォレスト」が姿を見せつつあった。全長三  
十メートル超、両翼全幅四十三メートル、機体重量三万二  
千キロ超という巨大な爆撃機であって、高度二万メートル  
を航行し、最高時速六四〇キロ、航続距離四八〇〇キロ、  
最大九トンの爆弾、貨物を積載することができた。

当初、アメリカ軍は対日爆撃の基地として中国・湖南省  
のどこかを想定した。東京まで直線距離で二千四百キロな  
ので、ぎりぎり往復が可能である。修理や補給が容易なイ  
ンド西ベンガル州カルコタ（カルカッタ）を本拠として、  
中国に設置する前線基地を併用する案が固まった。

ただしその時点で実戦配備が可能なB―29は一機も存在していなかった。量産が始まったのは四三年の秋以後であつて、対日爆撃を専門とする第二十爆撃集団が編成され、カルカッタの空軍基地に配備が始まったのは四四年三月である。

――それまでの間に陸・海軍が役割を分担しつつ、フィリピン島から北上する。

というマッカーサー案が採択された。

四三年十一月、カイロで開かれた米・英・中首脳会談（カイロ会談）でアメリカ政府が示した議案書に

――可能であればグアム、テニアン、サイパンもB―29戦略爆撃の基地とする。

という文言が盛り込まれたのは、そのような事情によつて

ともあれガダルカナル島の攻防のあと、マッカーサーが指揮する陸軍第六、第八軍とハルゼー麾下の太平洋艦隊が連携しつつ、日本に圧力をかけていくことになった。この作戦の中に、連合艦隊司令長官・山本五十六の暗殺、イギリス軍ビルマ戦線の支援および、日本本土爆撃などが入っていた。

ビルマ戦線は、日本にあつては「インパール作戦」（ウ

号作戦）と称される。一九四四年の一月七日に大本営において作戦が認可され、三月八日に進軍が始まった。

日本陸軍の戦争は中国戦線が好転せず、ガダルカナル島を拠点にアメリカとオーストラリアを分断する構想が失敗に帰していた。鉄か船か、鉄鉱石か支援物資かという行き詰まりを打開する策であつたにもかかわらず、

①インドから雲南を経由して中国に支援物資が送られて  
いるルートを遮断する

②インドのチャンドラ・ボースが指揮する反英組織と連  
携してイギリス軍とアメリカ軍を分断する。

という目標が設定された。

ベトナム戦争でアメリカ軍が「ホーチミン・ルート遮断」を標榜して北ベトナムを爆撃したことを思い出す。

これについて大本営は、

――我が陸軍が戦うべき相手はイギリス軍であつて、なぜならイギリスを攻撃することはナチス・ドイツを側面から支援することになるからである。海軍が太平洋で戦っているアメリカ軍との戦争は、所詮、今大戦の副次的なものに過ぎない。

という何とも珍妙な理屈をひねり出した。

二

日本においては、陸軍でさえ開戦直前に山下奉文が計算機と暗号の必要性を認識していた。だが大本営は、アメリカ軍の暗号解読力と総合的な機械生産力、さらに電子技術の効用を甘く見ていた。

なかでも「VT信管」と呼ぶ装置は、真空管の技術がものをいった。

VTとはアメリカ軍が外部に秘匿するために付けた仮の名「Variable Time fuze」に由来する。正式な呼称は「Proximity fuze」、日本語に訳すと「近接ヒューズ」ということになる。

それまでの砲弾は、爆発のタイミングを発射されてから何秒後と設定するか、命中した衝撃で爆発するかでしかなかった。ところが、VT信管付きの砲弾は、標的の数メートル以内には到達すると、対象物に跳ね返った電波をキャッチして爆発する。

そのことにはナチス・ドイツも大日本帝国も気がついてはいた。だが実装することができなかった。発射時の過剰な荷重に耐える信頼性の高い真空管と、劣悪な条件のもとでも安定して稼動する液体電池がなければならず、かつそ

れぞれを大量に生産できなければならなかった。

これに対してアメリカ軍は、ドイツから亡命していたアインシュタインの協力もあって、一九四二年に実用化テストを始め、四三年ごろから一部で実戦配備するようになっていた。取り付けられたのは主に高射砲や高角砲など対空火砲の砲弾だった。

ただし当時の技術では、敵味方の識別ができなかった。

そこでアメリカ軍はこの砲弾を発射するとき、同じ空域に味方航空機の侵入を禁止する措置を取った。日本軍の航空機は標的の艦隊上空に掩護機がないことを不思議に感じつつ、これ幸いと突入して次々に撃ち落とされた。罠に嵌ったようなものだった。このためにアメリカ軍の撃墜率は飛躍的に向上した。

日本海軍の航空機は、対空砲が命中してもいいのに翼がもがれ、機体に火がついて、抱えていた爆弾ごと爆発してしまふ。かつて太平洋の空を縦横無尽に飛び回り、多くの撃墜王を出した日本軍航空隊は、四四年に入るとたいした戦果をあげることができないまま、ずるずると後退していく。

VT信管が日本の航空戦力を壊滅に追い込んだ、といわれている。

その威力が発揮された最初の大きな戦いは、一九四四年

の六月十九・二十の二日間にわたって行われた「マリアナ沖海戦」である。

同時期に日本陸軍はインパール作戦に行き詰まり、ビルマ戦線から全軍撤退の覚悟を定めつつあった。ミッドウェー海戦での敗北、ガダルカナル島からの撤退に始まった日本軍の停滞は、この時点で一気に「涸落」と呼んでいい状態に転換した。

マリアナ沖海戦は、局面においてはサイパン島の攻防戦だったが、太平洋戦争全体から見ると日本軍が策定した「絶対防衛ライン」をめぐる攻防であったということができる。絶対防衛ラインとは、アメリカ軍航空機による日本本土爆撃の射程を意味していた。その防衛作戦は日本海軍の内で「乙計画」と呼ばれ、山本五十六のあとを受けて連合艦隊司令長官に就任した古賀峯一大将が策定を進めていた。

一九四四年の三月三十一日、パラオからミンダナオのダバオ基地に向かった海軍の飛行艇が、折からの強い低気圧に飲み込まれて行方不明になる事件が発生した。その飛行艇には古賀大將以下、連合艦隊の作戦指導に当たる幕僚が搭乗していた。幕僚が携帯した革鞆には作戦遂行に関する詳細な資料が入っていた。

飛行艇はセブ島に墜落したのだが、このとき現地の抗日

ゲリラ部隊からアメリカ軍に、その資料と信号書など一式が手渡されていた。乙作戦は筒抜けになった。このことをアメリカ軍は秘匿したため、日本は知らなかった。

日本の大本営は、アメリカ軍はニューギニア↓フィリピン↓台湾↓沖縄と島伝いに北上してくると読んでいた。それとヨーロッパ戦線で六月六日に連合国軍がノルマンディ上陸作戦を敢行したため、参謀本部第二部は

「当分の間太平洋方面は積極的作戦停滞の公算あり。但し政治的に本土空襲を企図することあるべし」と分析した。

アメリカは主力をヨーロッパ戦線に投入するから、ここしばらく積極的な攻勢はない、というのである。

この判断は完全に間違っていた。

北アフリカ戦線に勝利し、イタリアを降伏させ、ノルマンディ上陸を果たした現在、アメリカ合衆国は四三年一月のカサブランカ合意に縛られず、太平洋戦線に余剰の兵力を回すことができるようになったのだ。

厚い鋼板に覆われた上陸用舟艇、水陸両用艇、ジェット燃料の火炎を数十メートルも放つことができる火炎放射器、日本軍の機関銃や対戦車砲弾ではびくともしない最新鋭の重戦車などが陸続と北アフリカ戦線から太平洋戦線に回送され、さらに四一年十二月から建造を始めていた新鋭艦五

百六十隻が相次いで就役した。空母四十五隻、駆逐艦四百八隻、潜水艦八十八隻、戦艦・巡洋艦十九隻である。

同時にアメリカ作戦本部は、ニューギニアからフィリピンを経て黒潮に沿って北上する黒潮ラインに陸軍のマッカーサー大將を、グアムからテニアンを経てサイパンにいたるマリアナ・ラインに海軍のスプルーアンス大將をそれぞれ当て、両者が競って日本本土防衛線を突破するよう煽っていた。陸軍と海軍のメンツと両大將の功名争いという組織的・人為的要素を加味して、攻撃の手が緩まぬよう引き締めを図っていた。

### 三

黒潮ラインではフィリピンが、マリアナ・ラインではサイパン島が、それぞれクローズアップされた。ことにサイパン島をアメリカ軍が抑えれば、最大四千キロの爆弾を搭載できる超大型爆撃機「B-29」による本土爆撃が容易になる。

同爆撃機の航続距離は五千六百キロだったから、最長で日本の仙台、長岡、沖縄、台湾までが射程距離に入ることになる。つまり「絶対防衛ライン」が崩壊する。

対して日本軍はこのとき、一トンの爆弾の搭載が可能で

最大時速四百二十七キロ、航続距離が四千六百五十キロの「一三試陸攻深山」、四トンの爆弾を搭載でき時速五百九十キロで航続距離四千キロの「二七試陸攻連山」、B-29をはるかに超える超大型爆撃機「富岳」を試作していた。

これをサイパン島に実戦配備できるようにすれば、フィリピン、ニューギニアの連合軍基地を爆撃することが可能になるわけだった。どちらにとっても譲れない戦略拠点だった。

海戦に参加した艦船は小澤治三郎中将麾下の第一機動艦隊であって、その主力は以下のようなだった。

航空母艦 大鳳、瑞鶴、翔鶴、隼鷹、飛鷹、龍鳳、千歳、

千代田、瑞鳳

航空戦艦 伊勢、日向

大型戦艦 大和、武蔵、長門、金剛、榛名

重洋戦艦 愛宕、孝雄、摩耶、鳥市、妙高、羽黒、熊野、

鈴谷、利根、筑摩、最上

巡洋艦 阿賀野、矢矧、能代

駆逐艦 朝雲、風雲、磯風、浦風、雪風、谷風、初月、

若月、秋月、涼月、霜月、野分、満潮、山雲、

長波、朝霜、岸波、沖波、藤波、秋霜、早霜、

浜風、玉波、浜波、早波、島風、白露、時風、  
五月雨

投入された航空機は計四百五十三機だった。内訳は戦闘機百八十、爆撃機百五十、水上爆撃機二十四、攻撃機九十九である。このほか、諸島に建設した第一航空艦隊基地の航空戦力として、テニアン島に六百七十二機、トラック島に五百五十一機、ケンダリー島に百六十八機、ペリリュー島に二百四十機の計一千六百三十一機が配備されていた。この総兵力をもってアメリカ太平洋艦隊主力である第五十八機動部隊を殲滅しようという計画だった。

対するアメリカ第五十八機動部隊の陣容は、二年前のミッドウェー海戦のときとはまったく違っていた。ミッドウェー海戦のときアメリカ太平洋艦隊が保有する空母は三隻しかなかったが、マリアナ沖海戦には日米開戦と同時に急ピッチで建造された最新鋭の二十二隻、それと真珠湾から引き上げられ修理を完了した戦艦が艦隊に編入されていた。大型空母六、小型空母七、戦艦七である。艦船と砲門の数において、日本の連合艦隊にはほぼ匹敵する規模だった。

大型空母 レキシントン、ホーネット、ヨークタウン、  
バンカーヒル、ワスプ、エンタープライズ、

エセックス

小型空母

バターン、カボット、ペローウッド、モン  
レー、プリンスストン、サンハシント、カウペ

ウス、ラングレー

戦艦

アラバマ、サウスダコタ、インディアナ、ニ  
ュージャージー、アイオワ、ワシントン、ノ  
ースカロライナ

その他

重巡洋艦三、軽巡洋艦六、防空巡洋艦四、駆  
逐艦五十八

航空機

九百二機

帝国海軍が希求して已まなかった艦隊決戦が実現したの  
である。

六月十九日午前七時三十分、小澤部隊から二百四十一機  
の攻撃隊が舞い上がった。その中には最新鋭の艦上爆撃機  
「彗星」、艦上攻撃機「天山」が含まれていた。

### 第一次攻撃隊

〇七三〇発艦 第三航空戦隊六十四機（零戦十四、戦闘爆  
撃機四十三、天山七）

〇七四五発艦 第一航空戦隊百二十八機（零戦四十八、彗  
星五十一、天山二十九）

〇九〇〇発艦 第二航空戦隊四十九機（零戦十七、戦闘爆

撃機二十五、天山七）

## 第二次攻撃隊

一〇一五発艦 第二航空戦隊六十五機（零戦二十六、艦上

爆撃機二十七、彗星九、天山三）

一〇二〇発艦 第一航空戦隊十八機（零戦四、戦闘爆撃機

十、天山四）

第一機動艦隊から第二次攻撃隊が発艦しているころ、アメリカ第五十八機動部隊のレーダーが接近しつつある日本軍第一次攻撃隊航空機の機影を捕捉していた。ミッチャー中將はただちに艦載機四百五十機を上空に待機させた。日本の第一次攻撃隊は待ち受けていたヘルキャットに襲われ、その猛攻をくぐりぬけた百九十七機が敵艦隊上空に到達した。

標的である敵艦隊の上空に機影は見えなかった。

——千載一遇のチャンス。

と見た攻撃隊は、一斉に突入していった。

ここで悲劇が起こった。

日本の戦闘機、爆撃機は、レーダー誘導の対空砲に撃ち落され、さらにVT信管付きの対空砲弾でむなく海上に墜落していった。百九十七機中、実に七〇％に相当する百

三十八機が撃墜されたのだ。

第一次攻撃隊として飛び立った二百四十一機は、あつという間に五十九機になってしまった。

のちにアメリカ軍はこの空戦を「マリアナの七面鳥射ち」と呼んだ。

第一機動部隊の第二次攻撃隊八十三機は敵艦隊を見失って攻撃に失敗した。だけでなく、空中戦で五十四機を失った。

さらに空母「翔鶴」「大鳳」が、アメリカ軍の潜水艦が放った魚雷で撃沈した。小澤治三郎は第一機動部隊の旗艦を重巡洋艦「羽黒」に移し、艦隊の再編成を指令せざるを得なかった。

翌二十日、今度はアメリカ軍が攻撃に出る番だった。

ミッチャー中將は素敵に手間取ったが、午後四時に日本の艦隊を捉えることができた。薄暮戦となるのも顧みず、彼は艦載機全機の出動を命令した。戦闘機八十五、急降下爆撃機七十七、雷撃機五十四の計二百十六機である。

小澤は残存の七十五機を上空に待機させて迎え撃ったが、掩護の間隙を縫って低空で侵入したアメリカ軍の雷撃機が魚雷を投下した。雷撃機と潜水艦の魚雷で空母「飛鷹」が撃沈され、「瑞鶴」「隼鷹」「龍鳳」「千代田」が中・小破の被害を受けた。



四

航空機を失った艦隊は悲惨だった。

小澤部隊はあつてなく背走してしまった。

陸上の守備隊は、さらに悲劇だった。

マリアナ沖海戦の直前、サイパン島に斉藤義次中将が率いる陸軍第四十三師団など二万五千四百六十九人が上陸した。守備隊は先任の南雲忠一中将率いる海軍の陸戦隊六百六十人と合せ、三万一千七百余に膨れ上がった。このほか、同島には住民・軍属約二万五千人がいた。

ここにアメリカ軍の第五水陸両用軍団六万六千七百七十九人が上陸した。

トーチカに立てこもって闘う兵士や市民には、

——連合艦隊がくる。

という望みがあつた。

朝な夕なに、遠い水平線の向こうに何かが見えたといって島民は歓喜し、守備隊の士気は奮い立った。遠目が利く者が岬の高台に立ち、士官たちは双眼鏡で沖合いを凝視し続けた。その連合艦隊が、マリアナ沖海戦で消滅していることを、彼らは知らなかった。

さらに重要なことを、大本営は決定していた。

『機密戦争日誌』一九四四年六月二十四日付

海軍は『あ』号作戦に関し陸軍と協議の上、中止するに決す。即ち帝国はサイパン島を放棄することとなれり。来月上旬にはサイパン守備隊は玉砕すべし。最早希望ある戦争指導は遂行し得ず。残るは一億玉砕に依る敵の戦意放棄に俟つあるのみ。

この決定はサイパン島の守備隊や住民には一切知らされなかった。

日本側は三万人以上の将兵と一万人を超す市民が死亡し、アメリカ軍の死傷も一万四千人を上回った。七月六日、斉藤義次、南雲忠一の両中将が自決し、七日と八日に分けて敢行された玉砕戦でサイパン島における日本軍の抵抗は終息した。

四千人以上の市民・軍属が、のちに「バンザイ・クリフ」と名づけられた断崖から海に投身し、その遺体のためにアメリカの軍船が着岸できなかったほどだったという。

『機密戦争日誌』七月一日付

今後帝国は作戦的に大勢転回の目途なく、而かも独の様相も概ね帝国と同じく、今後逐次ジリ貧に陥るべきを以て

速やかに戦争終結を企図すとの結論に意見一致せり。即ち帝国としては甚だ困難ながら政略的攻勢に依り戦争の決を求めざるを得ず。此の際の条件は唯国体護持たるのみ。而して政略攻勢の対象は先ず「ソ」に指向するを可とす。斯かる帝国の企図不成功に終りたる場合に於ては最早一億玉碎あるのみ。

以後、「一億玉碎」という言葉が常套句のように使われていく。

七月十八日、東条英機はサイパン島陥落の責任を取って辞任し、二十二日、小磯国昭を首班とする内閣が発足した。小磯は

——自分の任期中に、わずかでも戦局を好転させ、以て次期和平内閣に指揮を譲る。

の覚悟で臨んだ、といわれる。

実際、彼は対中和平交渉を水面下で始めていた。だが指導力において力強さに欠如していた。

八月三日テニアン島、十一日グアム島、九月十五日ペリリュー島が陥落した。

八月二十五日、中国国民政府最高軍事顧問・矢崎勘十郎中将は、対重慶政府との和平工作に「見込みなし」と報告した。

九月十八日、ソ連政府から日本の特使派遣を拒否するという回答がもたらされた。ソ連を仲介役とする和平工作もまた頓挫したのである。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

アーネスト・キング 第六十四「真珠湾の次」補注

ダウンフォール作戦 対日上陸作戦で、台湾から北上して九州に上陸する「オリンピック作戦」と、太平洋から上陸して関東地方を占領する「コロンネット作戦」で構成されていた。作戦実施想定時期はオリンピック作戦が四十五年十一月、コロンネット作戦は四十六年春とされていた。海軍内で検討された計画に過ぎなかったが、マリアナ沖海戦で日本の航空戦力が壊滅的な状態に陥り、サイパン島を制圧してB-29による戦略爆撃が容易になったことから、日本の無条件降伏をにらみながら本土上陸の両面作戦が正式に決定された。

ウィリアム・ハルゼー William Frederick Halsey, Jr./1882-1959. 航空戦闘部隊司令官兼第二空母戦隊司令官としてアメリカ海軍の航空母艦の指揮を取った。ドゥーリットル部隊による東京初空襲の指揮を取った。四十二年南太平洋方面軍司令官となり、ソロモン沖海戦、ルンガ沖海戦などを通じて南太平洋地域での連合国軍優勢を決定づけた。

チェスター・ニミッツ 第五十七「駆け引き」補注

レイモンド・スプルーアンス Raymond Ames Spruance/1886-1966. 最終階級は海軍大将。四十二年五月、病氣療養のため一時離任したハルゼーに代わって第十六任務部隊司令官となり、空母「エンタープライズ」でミッドウェー海戦に臨んだ。エンタープライズから発艦した攻撃機の爆弾が日本の空母「加賀」「赤城」に致命傷を与え、さらに空母「飛龍」、重巡洋艦「三隈」

を撃沈する戦果をあげた。

B-29の量産 四三年の秋から量産に着手したが、インドと中国の飛行場建設の遅れ(ブルドーザーやクレーンがなく、人手で工事が進められたため)もあって計画は大幅に遅れた。四四年一月には九十七機が完成しているべきところ、飛行可能な機体は一機しかなかった。二月に入って「カンザスの戦い」と呼ばれる突貫工事がジョージア州マリエッタ工場でスタートし、三月下旬にB-29の編隊がインドに向けて出発した。ちなみに編隊はイギリスを経由してインドに向かった。

チャンドラ・ボース Netaji Subash Chandra Bose/1897-1945. 国民会議派議長の時インド独立闘争についてガンジーやネルーらと路線を異にし、初めヒトラーに枢軸国軍のインド侵攻を直訴した。しかし対ソ戦に最も力を注いでいたヒトラーはこの提案を拒否したため、ボースは今度 は日本に協力を求めた。四三年インド独立連盟東亜代表者大会で自らを首班とする「自由インド仮政府」の樹立を表明した。大日本帝国政府は独立国家として承認するに当たって「領土と人民を基礎とする国家の存在が不可欠である」とする見解に沿い、日本海軍が占領中のアンダマン、ニコバル両諸島を自由インド仮政府に帰属させることを決定した。

日本が無条件降伏した直後、ソ連との連携を探るためサイゴンから飛び立った飛行機が墜落して死去した。その墓は東京・杉並の蓮光寺にある。しかしインドでは戦後長く生存が信じられ、ソ連領内でボースを見たという目撃証言が後を絶たなかった。

アインシュタイン Albert Einstein/1879-1955. ドイツのウルムという町のユダヤ人一家に生まれ、十二歳でユークリ

ツド幾何学を独学した。一八九四年家族はイタリアに移住し、アインシュタインはスイスのチューリヒ大学に進んだ。一九〇五年スイス特許局職員だったとき「相対性理論」「光子仮説」「ブラウン運動理論」の論文三篇を発表し、これが認められてチューリヒ大学教授となった。二一年にノーベル物理学賞を受賞したが、それは光子の存在を指摘する光電効果の発見に対してだった。

ナチスによるユダヤ人迫害が激しさを増した一九三三年、ロバート・オッペンハイマーの勧めでアメリカ大統領ルーズベルトに原子爆弾の開発に貢献できるといふ内容の手紙を送り、これが容認されてアメリカ合衆国に亡命した。亡命後はプリンストン高等学術研究所で研究を続けたが、彼の亡命をきっかけに原爆開発プロジェクト「マンハッタン計画」がスタートし、VT信管が実現した。

サイパン島 北マリアナ諸島の中で最大の面積を持つ。紀元前から「チャモロ」と呼ばれる海洋性民族が定住していた。一五二一年世界一周を目指すマゼランの艦隊が上陸し、スペイン王妃マリ・アンヌの名にちなんで「マリアナ」と命名した。のちスペインがドイツに売却し、第一次大戦で大日本帝国の信託統治に入った。同島には大日本帝国の南洋庁支所があって、太平洋委任統治領の中心となっていた。「太平洋の防波堤」といわれたゆえんである。アメリカ軍が占領してのちは日本本土を爆撃するB-29の基地となり、戦後はアメリカ政府の信託統治となった。

古賀峯一 こが・みねいち／1885～1944。佐賀県に生まれ海軍兵学校、海軍大学校を出て一九一七年少佐。二六年在フランス日本大使館付武官、二七年ジュネーブ軍縮会議全権団随員、三三年少将に進み軍令部参謀。三六年中将、三七年軍令部次長、

四二年大將・横須賀鎮守府長官を経て四三年二月山本五十六のあとを受けて連合艦隊司令長官となった。四四年三月三十一日、バオにあっての総司令部がアメリカ軍機の猛爆撃を受けたときフィリピンのダバオに移動するため乗込んだ水上艇が強い低気圧に巻き込まれ遭難した。四月五日「殉職」と断定され、死後、元帥に昇格した。山本五十六の撃墜死を「海軍甲事件」、古賀の遭難死を「同乙事件」と呼ぶ。

ノルマンディ上陸作戦 上陸作戦の準備は四三年春から開始され基本計画は四四年四月に固まっていた。しかしドーバー海峡上空が天候不順のため実施が順延された。当初「Dデイ」(作戦実施日)は六月五日だったが折からの暴風で順延され、六日も悪天候だったがナチス・ドイツ軍の隙を衝くことができるという戦略的な判断もあってゴースインが出た。上陸軍第一波はイギリス三個師団、アメリカ二個師団、空挺部隊はイギリス一個師団、アメリカ二個師団で、計八個師団だった。

重爆撃機「深山」 しんざん…一式陸上攻撃機を大型化した重爆撃機。実際の最高速度は三百九十キロ/時、積載可能重量は八百キロで、六機が製作されたが、速度の問題から輸送用として使われた。

爆撃機「連山」 れんざん…陸上への爆撃に絞って開発された重爆撃機で四機が試作されたが実戦配備はされなかった。

超大型爆撃機「富岳」 ふがく…エンジン六基を備え、最高七百八十キロ/時で十五トンの爆弾を積載、二十ミリ機銃四基を備える超大型爆撃機。アメリカ本土爆撃を構想し陸海軍共同で計画された。しかし当時の日本の技術的では完成させることは難しかった。

小澤治三郎 おざわ・じざぶろう／1886～1966。宮崎県に生まれ一九〇六年海軍兵学校卒、三〇年大佐。三六年少将、三七年連合艦隊参謀、三九年第一航空戦隊司令官、四〇年中将に進み四一年第一南遣艦隊司令長官、四二年第三艦隊司令長官、四四年第一機動艦隊司令長官を兼務した。四五年四月海軍総司令長官兼連合艦隊司令長官兼海上護衛司令長官となり終戦を迎えた。

空母「レキシントン」 初代は一九二七年十二月に就役し四二年五月八日の珊瑚海海戦で日本海軍艦載機の放った魚雷と爆弾によって撃沈された。マリアナ沖海戦に参加したのは二代目艦で排水量二万七千トン、全長二百六十六メートル、最高速度三十二・七ノット／時、艦載機百三機。四三年二月に就役し九一年十一月に退役、現在は博物館として展示されている。

空母「ホーネット」 初代は一九四一年十二月に就役し四二年十月の南太平洋海戦で沈没した。マリアナ沖海戦に参加したのは二代目艦で、当初は「キアサージ」という艦名だった。四三年一月「ホーネット」の名を継ぎ、四七年予備役に編入された。その後、対潜哨戒空母として復帰し六六年アポロ宇宙船の回収に使われた。**空母「ヨークタウン」** 初代ヨークタウンは三九年九月大西洋艦隊に就役、四二年六月ミッドウェー海戦で沈没した。四三年四月、ボム・ノム・リチャードを「ヨークタウン」に改名、四七年予備役となったが五七年対潜空母として復帰した。七〇年再度の予備役編入後、七三年除籍となった。

空母「エンタープライズ」 太平洋戦争の全期を通じて生き残ったアメリカ太平洋艦隊旗艦。一九三八年五月に就役し、四二年六月ミッドウェー海戦で艦載機が日本連合艦隊の空母「赤城」「加賀」「飛龍」駆逐艦「朝潮」、同年八月第二次ソロモン海戦で空母「龍

驥」、同年十月南太平洋海戦で空母「翔鶴」、同年十一月ガダルカナル沖海戦で戦艦「比叟」、重巡洋艦「衣笠」をそれぞれ撃沈するなど最大の活躍をした。四七年予備役に編入されアナポリス海軍兵学校に保存されている。のちのエンタープライズは世界初の原子力空母、かつ艦載機のほか対空砲などの兵備を持たない空母として六一年十一月に就役、「ビッグE」の通称で知られ、太平洋艦隊旗艦の座を「J・F・ケネディ」に譲った。

彗星 すいせい・ドイッ・フォックカーウルフ社から入手した設計図をもとに開発された。機首に置いたエンジンの下に冷却用外気吸引口がある独特のデザインだった。全長十・二メートル、全幅十一・五メートルで乗員二名、最高速度五百五十二キロ／時、七・七ミリ機銃三基を備え、最大五百キロの爆弾を装着できた。

天山 てんざん・一式陸攻、九七式艦攻に代わる次期主力攻撃機として設計され、最高速度は四百六十五キロ／時、十三ミリ機銃一基、七・九ミリ機銃一基を装備し八百キロ爆弾または魚雷一本を装着できた。「深山」「連山」など山シリーズの第一号機として大きな期待を集めたが、日本海軍の伝統的な防衛力軽視のため簡単に撃墜されていった。

バンザイ・クリフ 現地名は「プンタン・サバナタ」岬。岬沖合いの海底十三メートルの岩礁に、一九九九年六月、ダイバーでもある東京・蔵前の浄念寺第二十六世石田住職によって慰霊塔が建立された。

070 修羅

第七十

修羅

一

太平洋の戦局が大きな転換点にさしかかっていたとき、大東亜戦争（陸軍の戦い）も転機を迎えていた。香港、シンガポール、コレヒドール、ジャワ、スマトラと連戦連勝を重ねていた陸軍は、ガダルカナル島で前進を阻止されていた。

ミッドウェー海戦の敗北とガダルカナル島からの撤退、つまり一九四三年二月七日で大日本帝国の戦いは終了したのも同然であった。こう書くのはそれ以後、二年六か月も続いた戦闘で傷つき斃れていった二百万人を超える人々を侮辱するような思いがある。

だが、国民の生命と財産の保全に全責任を負うことが、国家というものの最終的な存在意義であるとすれば、余力を残して講和を目指す動きが封殺されてしまったのは、いかにも悲しいことだった。

ガダルカナル島から日本軍の撤収が完了した（とされる）

翌日の四三年二月八日、『機密戦争日誌』は次のように記している。

斯くしてガ島の消耗戦は茲に終了し、船舶の消耗も次第に減少すべく予想せられ、大東亜戦争は再び常道に乗りたる感あり

陸軍参謀本部および大本営は、まだこの戦争の本質を理解していなかった。彼らは「消耗戦」という言葉を使いながら、それはガダルカナル島に限定したことだと解釈していた。

開戦のとき、参謀本部は

——イギリスを降伏させればアメリカは戦意を失う。

と読んだ。

ところが今度は、連合国軍が

——ドイツが降伏すれば、日本は戦意を失う。

と読んでいた。

四三年に入って連合国軍は勝利をほぼ確信するようになっていた。この時点でナチス・ドイツ軍は北アフリカでロンメル將軍率いる機甲師団が敗北し、冬將軍の前にスターリングラードから撤退を余儀なくされていた。

またイタリア・ファシスト軍は四一年一月、エチオピア

戦線で大敗して急速に勢いを失い、四二年末時点でムツリ―二政権の崩壊は時間の問題と見られていた。状況は大きく変わりつつあった。

その象徴的な出来事は、四三年一月十四日にモロッコのカサブランカで開かれた米英拡大会談である。会談には両国政府首脳と軍参謀が集まり、次のようなことが確認された。

- 一、英米両国はナチス・ドイツの打倒を第一に優先する。
- 一、太平洋戦線はアメリカ合衆国が主に担当する。
- 一、アジア戦線においてイギリスはビルマ奪回作戦「アナキム」に専念する。

このことは、アメリカ合衆国はヨーロッパ戦線に影響を及ぼすような大規模かつ長期的な作戦を太平洋戦線で実施しないことを意味していた。地中海のヤルタでルーズベルトがチャーチルに言ったように、当分の間、アメリカ合衆国軍は日本軍を「ベイビー・アロング」においてほしい、というのである。

そこでアメリカ合衆国海軍が考えたのは、日本軍の動きを封じ込める作戦だった。

三月十二日、アメリカ統合参謀本部主催の太平洋軍事会

議では、ベイビー・アロングを基本方針とする「エレクトン」作戦が採択された。

マッカーサーが指揮する陸軍第六、第八軍とハルゼー麾下の太平洋艦隊が連携しつつ、太平洋に散在する島々をしらみつぶしに制圧し、じわじわと日本に圧力をかけていくことになった。

このとき決定された十三の作戦の中に、山本五十六の暗殺、ラバウルの制圧、ニューギニア島の奪回、アリューシヤン列島からの日本軍の排除、インド・中国からのビルマ戦線支援および、日本本土爆撃などが入っていた。

エレクトン作戦はただちに実行に移され、四月十八日、アメリカ海軍のP-38双胴戦闘機が連合艦隊司令長官・山本五十六大将を乗せた海軍一式陸上攻撃機を撃墜することになった。遺体が発見されたのは四月二十日である。大本営は国民にこの事実を秘匿し、アメリカ軍もまた暗号解読の事実を知られたくないために沈黙を守った。

五月二十九日、北の守りであったアリューシヤン列島キスカ島の山崎部隊が玉砕した。それを代償にして駐留部隊五千六百三十九人が脱出に成功した。このころになると、さしもの零戦もアメリカ軍に弱点が見抜かれていたため、大きな戦果をあげることができなくなっていた。

七月、ヨーロッパ戦線で連合国軍がついにシチリア島上

陸を果たした。イタリヤの喉元に匕首を突きつけたのである。これがためにムッソリーニ政権が崩壊した。

八月三日、中部ソロモン諸島のニュージョージア島をアメリカ軍が奪回した。

十月十八日、ニューギニアから日本軍が消えた。

十一月一日、アメリカ第三海兵師団がブーゲンビル島に上陸した。この島には日本の陸軍四万四千人、海軍二万一千人の計六万五千人が配置されていた。

また、その西北に位置するニューブリテン島には陸軍七万五千人、海軍四万人の計十一万五千人がいた。ソロモン諸島の守備隊を加えると、この地域だけで日本兵は三十万人に達していた。

ところが制海権を失い、制空権を維持できなくなった島の日本軍は孤立し、食糧、武器、弾薬、医薬品などの補給が乏しくなり、ガダルカナル島やニューギニア島と同じ状況が生まれつつあった。大本営はなすすべを知らなかった。

『機密戦争日誌』一九四四年一月二十六日付

三十万玉砕の秋到らば、好むと好まざるとに拘らず、国内の正気勃然として興り、真に皇国の興廢を自覚し、裸一貫、総力の結集に邁進し得べし

二

同様のことがビルマ（ミヤンマー）方面でも発生した。一九四四年一月に発動した「インパール作戦」（「ウ」号作戦）がそれである。

朝日新聞社の記者としてこの作戦に同行していた丸山静雄は『インパール作戦従軍記』（岩波新書）で次のように書く。

インパール作戦とは、ビルマに進入した日本軍が幾多の作戦によつてほぼ全ビルマを占領したあと、さらにビルマ国境を越えてインドに進攻しようとした一大作戦をいう。

この作戦はビルマを確保するためにはビルマの防衛線を国境外に推進しなければならぬとする戦略と、インドに兵を入れ、インドを独立させて英国を浮き上がらせ、英米の連合戦線を分断することによって太平洋戦争を終結に導いてゆきたいとする政略とが結びついて企図されたものである。

作戦は第十五軍（軍司令官は牟田口廉也中将）が三個師団を持ってインパール平原に拠る英軍第四軍（軍団長はスクーンズ中將）の三個師団を攻撃するというもので、主力

(第三十三師団Ⅱ弓兵团)をもつて南からインパールに迫り、一部兵力(第十五師団Ⅱ祭兵团)をもつて東からインパールを衝き、他の有力兵团(第三十一師団Ⅱ烈兵团)をもつて長駆ウクルル山中を突破してコヒマに進出、英軍の退路を断つという大胆な構想であつた。

このあたりを図解的に説明すると、日本の陸軍は次のような理屈をひねり出した。

——我が陸軍が戦うべき相手はイギリス軍であつて、なぜならイギリスを攻撃することはナチス・ドイツを側面から支援することになるからである。海軍が太平洋で戦っているアメリカ軍との戦争は、所詮、今大戦の副次的なものに過ぎない。

何とも珍妙な理屈だつた。

実態は中国大陸での戦闘が膠着状態に陥つたことの打開策であつたにもかかわらず、目的として、

①インド——雲南經由でイギリス、アメリカの支援物資が中国に送られているのを遮断すること。

②日本本土爆撃を行っているB—29の発進基地をチャンドラ・ボースが率いるインドの反英組織との連携で壊滅すること。

——などが掲げられた。

ビルマ方面に大本営が投入した兵力は、独立混成第二十四旅団、第十五軍(第三十一師団、第十五師団、第三十三師団)、第二十八軍(第二師団、第五十四師団、第五十五師団)、第三十三軍(第十八師団、第五十六師団、第五十三師団)だつた。このうち牟田口廉也中将麾下の第十五軍約十二万人がインパール作戦に充てられた。

なぜ牟田口だつたかという点、

——戦争の引き金を引いた張本人である。

というのが理由だつた。

牟田口は盧溝橋事件を反省したわけでなく、

「もし自分の力によつてインドに侵攻し、大東亜戦争に決定的な影響を与えることができれば、今次大戦勃発の遠因を作つたわたしとしては、国家に対して申し訳が立つ。男子の本懐としても、まさにこのうえなきことである」

と功名に駆られていたのだから始末に負えない。

屁理屈と片意地、功名心のあげく、陸軍参謀本部はとんでもない指令を発した。

——食糧、弾薬は歩兵が携行し得る三週間分をもつて限度とする。

こんなバカな作戦があるか。

ガダルカナル島に孤立した日本陸軍の将兵に対して、海

軍は消耗を覚悟の上で食糧や武器弾薬を送り続けた。ところがインパール作戦では、

——食糧は占領先で調達し、窮すれば資材運搬用の牛馬を食すべし。

というのである。

このような前近代的で非合理的な方針がまかり通ったのは、もはや玉碎戦しか打つ手がなくなった証拠でもあった。

三

三月八日、インパール作戦が発動された。その三日前にイギリス軍のウインゲート空挺旅団がビルマに降下している。十五日、牟田口中将率いる第十五軍がチンドウイン川（ミャンマー最大のエーヤワディー川＝旧イラワジ川の支流）に到達し、渡河作戦が敢行された。

ビルマ方面の制空権は、すでにイギリスに握られていたし、第十五軍に与えられた航空機は二百機に満たなかった。牟田口は

——短期にインパールを陥落するには、自動車中隊百五十、駄馬輜重兵中隊六十が必要。

と申請したが、大本営が送ってきたのは自動車中隊二十六、駄馬輜重兵中隊十四に過ぎなかった。これは牟田口に

とつても予想外のことであったに違いない。

作戦の序盤は順調に進み、四月六日に日本軍はコヒマ（ミャンマー北部の交通の要）を制圧したが、ここで足が止まった。アメリカが機械化部隊二個師団を派遣して日本軍の前進を阻んだほか、イギリス空挺ゲリラ師団が日本軍の補給を妨害した。

そのために日本軍の兵士は野草を食べて命をつなぎ、多くの命を代償にして敵から奪った武器と弾薬で戦い、折からの豪雨と泥濘の中、マラリア、デング病、コレラに斃れていった。

四月、第三十一師団長の佐藤幸徳（中将）は悲痛な電報を打った。

弾一発、米一粒毛補給ナシ
敵ノ弾、敵ノ食糧ヲ奪ツテ攻撃ヲ続行中

文末の「攻撃を続行中」は、なお戦意を失っていないことを示すための形容詞に過ぎなかった。爆弾を抱えてイギリス軍の戦車に体当たりしていく兵士、衣服をつけたまま半ば白骨化している兵士の遺体を目の当たりにして、六月三日、佐藤は独断で撤退を決意した。

児島襄は『太平洋戦争』下巻「悲劇のインパール作戦」

で次のように記す。(原文ママ)

道ばたには点々と負傷兵が横たわっていた。その眼、鼻、口にウジ虫がうごめいている。のびた髪の毛に真っ白にウジ虫が集まり、白髪のように見える兵が歩いていった。木の枝に妻子の写真をかけ、その下でおがむように息絶えた死体、マラリアの高熱に冒されて譫言を口走る者、ぱっくりあいた腿の傷に指を入れてウジをほじくり出す兵士……泥の中にうずくまったまま

「兵隊さん、手榴弾を下さい……兵隊さん」
と呼びかける兵士がいる。

苦しみから逃れるため、自決のための手榴弾がほしい、
というのである。

六月三日の第三十一師団の独断撤退で第十五軍は崩壊した。独断で撤退を支持した第三十一師団長・佐藤幸徳は軍法会議にかけられることを覚悟したが、実をいうと彼が

「弾一発、米一粒も補給ナシ」

の電文を討った直後の四月三十一日、ラングーンの作戦司令部では

「インパールには戦局を左右するような戦略的価値なし」
という報告が行われていた。

また五月十五日には東京の陸軍参謀本部に

——インパール成功の公算は逐次低下しつつあり。
という報告が届けられた。

にもかかわらず参謀本部は

「インパールはいまや世界的問題である」

と面子にこだわって、作戦の継続を決定した。このために将兵三万五百二人が戦闘で、四万一千九百七十八人が戦傷病で死亡した。

『機密戦争日誌』一九四四年七月四日付

ビルマ『ウ』号作戦中止せらる。東亜情勢帝国に取り
益々非なり。此の秋奮起せずんば悔を千載に残さん

——悔を千載に残さん。

などと無責任に文学的な表現をしている場合ではなかった。牟田口という名誉欲のかたまりのために何万もの兵士を見殺しにした罪の意識は片鱗もなかった。

このインパール作戦を

「ひどい作戦だった」

と回顧するのは、のちに伊藤忠商事からセンチュリ
サーチ センター社長・会長となり、情報サービス産業協

会会長を務めた高原友生である。

高原は一九四四年に陸軍士官学校を卒業し、歩兵第五十八聯隊に配属された。祖父は陸軍軍人、父は海軍少将という軍人一家だったから、軍人になることには全く抵抗がなかった。

歩兵第五十八聯隊は、その年の二月に発令された「ウ」号作戦に参加し、高原は少尉ながら聯隊旗手という名誉ある仕事を任された。

「わたしらは司令部に直属していたからまだよかった。でも食べ物はないし、イギリス軍の追撃で部隊はどんどん崩れていく。とうとう捕虜になってビルマで抑留生活を送りました」

そのとき、現地の人が親切に接してくれた。

「たいへんな迷惑をかけたのに、お世話になった。そのご恩返しをしている」

高原はビジネスの現場から退いた現在、非営利特定事業法人ミャンマー経済研究所（MERAC）理事長として、文化交流や経済支援活動に従事した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

イタリア・ファシスト トスカーナ公国、シチリア王国、ローマ教皇国を統一して一八七〇年九月に成立したイタリア王国は、第一次大戦では連合国に参加したが国内の経済は低迷し、社会主義運動が活発になった。社会主義運動はやがてナシヨナリズムと結びつき、一九一九年ごろを境に新しい社会運動として「闘争的ファッショ」が台頭した。社会主義から出発した北一輝が国粹主義に傾斜していったプロセスと近似している。ファッショ(Fascio)は共和制ローマ時代、法官の権威を示す紋章を意味する。

戦闘的ファッショ運動は一九二一年の総選挙で三十五議席を獲得し、同年十一の第三回大会でベニート・ムッソリーニ(一八八三―一九四五)が「国民ファシスタ党」の結成を宣言した。ムッソリーニは退役軍人や憂国論者の支持を得て「黒シャツ隊」と呼ばれる行動部隊を編成し、これを武装化して国軍を圧倒する勢力を形成した。二二年十月、約四万人の黒シャツ隊が「ファシスト革命」を掲げて国民ファシスタ党への政権移譲を要求するデモ行進を開始すると、ときのファクタ内閣は戒厳令を敷いて阻止しようとしたが国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世が戒厳令を拒否したことから政権が瓦解した。これが「ローマ進軍」と呼ばれる。

ローマに入ったムッソリーニは国王に組閣令を出させて組閣、当初は閣僚十四人の十人は他の政党から出さかただったが二三年に選挙法を改正して長期政権の基礎を築いた。以後二六年までの間に政治結社の禁止や言論統制などにより独裁政権化し、さら

に二八年にいたって大評議會を国家最高機関とすることによってムッソリーニは国民ファシスタ党をすら超越する絶対的な地位を獲得した。

ナチス・ドイツとの関係は初期においては決して友好的でなく、オーストリア併合をめぐって一時期は軍事衝突の危機的緊張を持つ状況にあった。ところが三四年末に勃発したイタリア領ソマリランドとエチオピアの紛争にイギリスが介入したことから反英に転じ、イタリア軍がエチオピアに侵攻してこれを併合した。ナチス・ドイツと軍事同盟を結んだのは三九年五月である。

アナキム ビルマ奪回作戦の名称。ABDA司令長官・インド軍最高司令官アーチボルド・ウェーヴェルの幕僚が策定した「アラクン作戦」を継承して立案された。

エレクトン作戦 マッカーサーが立案したとされる。一九四二年秋に行われたアメリカ陸海軍・政府首脳による太平洋軍事会議で海軍省のアーネスト・キング作戦部長(大将)はオレンジ計画を改良した「レインボー計画」を提唱した。ハワイを拠点に中部太平洋のサモア↓ビルバート諸島↓マーシャル群島↓トラック↓グアムと軍を進めフィリピンから日本本土を攻撃するというものだったが、同じ海軍のハルゼー、ニミッツ、スプルーアンスといった諸将が反対した。陸・海軍が役割を分担しつつ日本軍を封じ込めるというマッカーサー案が採択され、これがのちに「カートホイール(車輪)作戦」となった。

ムッソリーニ政権の崩壊 イタリア軍はユーゴ、ギリシャへ進軍したが軍事力不足のためあつてなく連合国軍に奪回され、四三年七月、連合国軍がシチリア上陸作戦(ハスキー作戦)に成功すると、ファシスト評議員はムッソリーニ不信任を可決した。

ウィンゲート空挺旅団 制式名称はイギリス第三インド師団第七十七旅団、第百十一旅団である。この二旅団は四三年二月六日から十一日までの間、グライダーで「ブロードウェイ」と呼ばれたフーコン地区インドウに降下し、九千二百五十人、驢馬一千三百五十頭、火砲・弾薬、車両など二百五十トンをもって作戦行動を開始した。

指揮を取ったウィンゲート少将は「われわれは敵の胃袋に入った。わが剣を敵の肋骨に突き刺した」と言った。対して牟田口中将は「降りた連中は補給をどうするのか。放っておいても干乾になる。牟田口は幸運だ」とその存在を軽く見ていた。

ウィンゲート Orde Charles Wingate / 1903～1944。第二次世界大戦中ビルマ戦線で英印軍特殊空挺部隊チンディットを編成した。一九四四年三月二十四日、インパールの飛行場で事故死した。

ビルマ戦線への補給 日本軍の補給を担ったのは泰緬鉄道だった。バンコクのノンブラドックからビルマのタンピサヤまで四百十五キロを結ぶ。鉄道の建設には連合国軍（イギリス、オランダ、フランス、オーストラリア）捕虜五万人とタイやビルマの労働者十万人が動員され、捕虜一万五百六十二人、労務者三万人が死亡した。このときは映画『戦場にかける橋』、そのテーマソング『クワイ川マーチ』で知られる。

四三年十二月に全線が開通し、四四年五月まで毎月一万二千トン前後の物資を運んだ。ところがタンピサヤから前線までトラックがなかったため、日本軍は戦闘に従事できない傷病兵を補給部隊に編入し彼らに物資を背負わせて山道を運ばせた。それを知ったイギリス空挺旅団は日本の補給兵を樹上から狙撃して妨害した。

狙撃されないまでも途中で動けなくなりそのまま死亡することもしなくなかった。

日本兵の戦いぶり 児島襄『太平洋戦争』（下）には次のような悲惨な記述がある。

「第百六十一インド旅団のM3戦車が戦場に現われた。連射砲を命中させても、この大型戦車は平然としている。サイダー瓶にガソリンを詰めた火炎びん攻撃にも屈しない。黄色爆弾をフトンに詰めた、フトン爆弾を抱いた肉攻班が、わが身をキャタピラの下敷きにして、やつと擱座させる。その轟音を合図に、「ワッショイ、ワッショイ」と声をかぎりに叫びながら、敵陣に殺到するのである」

戦車「M3」 アメリカ合衆国で開発・製造され、第二次大戦中、連合国軍に供与された。重量十二・九トンの軽戦車と二十六トンの中戦車があった。イギリス第七機甲旅団に属する王立第二戦車連隊にはM3軽戦車が百十五両（百五十両とも）配備されていた。

高原友生 たかはら・ともお / 1925～2009。二〇〇四年五月、長年の業界活動に対し藍綬褒章を受けた。

071 P L A N & D O

第七十一

PLAN&DO

一

インパール作戦が開始されて一か月後、一九四三年の四月に進水した超大型航空母艦「大鳳」は、全長二百六十メートルの甲板を備え、艦上爆撃機、戦闘機など五十機以上を艦載できる格納力を持っていた。

甲板に鉄鋼を張った甲装仕様で、高度三千メートルからの八百キロ爆弾もしくは一二〇〇メートル離れた場所からの六インチ砲直撃にも耐えられる能力があった。魚雷攻撃を受けて浸水しても、限定区画で被害を抑え、全体のバランスを取る仕掛けが施されていた。

ジリジリと追い詰められていた連合艦隊にとっては、起死回生の特効薬にも似た「不沈空母」が登場した。兵員輸送と航行訓練を兼ねて呉↓シンガポール↓リンガ↓タウイタウイ↓ギラマスと航行し、六月十八日、マリアナ沖海戦に臨んだのが初の実戦参加だった。

翌十九日の海戦で午前八時十分過ぎ、アメリカ潜水艦

「アルバコア」が放った魚雷六本のうちの一本が右舷前方に命中した。このとき積載していた航空燃料の管に亀裂が入った。燃料は気化して密閉された区画に充満した。

午後二時半過ぎ、帰還した攻撃隊の一機が胴体着陸した瞬間に大爆発が起こった。懸命の消火活動が続けられたが、午後四時半、左舷に大きく傾斜し沈没した。就役からわずか二か月半であっけなく海の藻屑となってしまった。

海軍にはもう一つの不沈空母があった。いや、潮岬沖で沈没した超弩級空母「信濃」のことではない。ここでのいうのは島のことである。

源田實という中佐がいた。

ミッドウェー海戦（一九四二年六月）、第二次ソロモン海戦（四二年八月）、マリアナ沖海戦（四四年六月）、エンガノ沖海戦（四四年十月）などで、連合艦隊は多くの空母を失った。ばかりでなく、南太平洋や東シナ海、日本近海を航行しているときにも米潜水艦の標的となった。

大本営は急ピッチで「雲龍」型中型空母、「伊吹」型重巡空母を建造したが、その完成を待っていることはできなかった。

——空母が足りないなら、島を空母と見立てればいいではないか。

と源田は思いついた。

「不沈空母」構想である。

それはいまさらの話ではなく、一九四二年（昭和十七）の早い段階で着想されていた。

マリアナ諸島、パラオ、ニューギニア、フィリピンを結ぶ海域を「内南洋」とし、そこに浮かぶ島嶼に航空基地を建設する。そこに配備した基地航空部隊をもつて空母部隊と同様の航空作戦を展開するといふのである。ミッドウェー島がその最初の候補だった。

ミッドウェー島の攻略は失敗したが、源田の構想は着実に実行されていた。

トラック、テナアン、サイパンといった島々に第一航空艦隊（一航艦）の航空部隊が配備され、四四年二月の時点では計十三の航空隊が編成されていた。計画では最新鋭の戦闘機、爆撃機計一千六百二十機が配備されるはずだったが、航空機の生産が追いつかなかった。

このため現地の航空部隊は、墜落したり破壊された航空機の残骸を組み合わせて、どうにか戦闘機らしき航空機を作り出した。また大本営は旧式の戦闘機や爆撃機をかき集め、機数だけは計画を達成した。ところが今度は輸送船と搭乗員が足りなかった。

マリアナ沖海戦、エンガノ岬沖海戦が行われた一九四四年は、インパール作戦の停止（失敗）、サイパンの陥落と、

日本軍の劣勢はつきりした年だった。欧州戦線ではイギリス空軍がドイツを爆撃し、ドイツ軍がクリミア半島から撤退、連合軍がノルマンディに上陸と、第二次世界大戦そのものが攻守転換した年でもあった。

弱り目に祟り目ということではなく、劣勢に立ったとき内包していた弱点が噴き出してくる。日本軍ないし大日本帝国にあつては、情報の処理と評価の問題だった。どのように情報を入手するか、入手した情報をどう分析するか、分析した結果をどう活かすか、実施した作戦の成果をどのように評価するかである。

一般に、企業経営やプロジェクト管理の基本的な手法とされる「PLAN&DO」は、PLANの前にAS—ISの分析が、DOのあとにCHECK（評価）がなされる。そのうえで適切なAction（実行）がある。いわゆるPDCAは、Cにこそ重きを置かなければならない。

さらにいうと、すべての前提となるAS—ISは客観的で正確な「事実」に基づかなければならない。主観的な感想、希望的観測、「べき」論や「だったら」の仮定、周辺関係者への配慮や忖度などを一切排除し、事実を事実として受け入れることからスタートする。

DOのあとのCHECKも同様である。信頼性のある情

報が適正な手段で入力され、正しい方程式で数値化され、その結果は冷静かつ批判的に受け止めなければならない。このとき「べき」論や「だったら」の仮定は有効に作用することもあるのだが、決してその前提とはなり得ない。

だが日本軍は、そのすべてに「大和魂」と「根性」を当てはめた。その典型的な例は、四四年十月十二日から十六日にかけて、波状的に展開された台湾沖航空戦である。

二

マリアナ沖海戦（あ号作戦）に完敗した日本海軍は、最後の決戦「捷号作戦」を立案した。フィリピン方面を意味する捷一号、九州南部から台湾島にかけて展開する捷二号、本州・四国・九州および小笠原諸島の死守をねらった捷三号、北海道を防衛する捷四号である。

アメリカ軍はフィリピン（ルソン島）再上陸を予測させる活動を頻繁に示していた。いわゆる「キングⅡ作戦」である。ミンダナオ島奪還計画（キングⅠ作戦）に続くものだった。ソロモン↓ニューギニア↓モロタイと兵を進めてきたので、次はルソン島ということは容易に推測できた。

そこで捷一号が発動された。公式記録による作戦発動日は四四年十月十八日とされる。しかし台湾沖航空戦が行わ

れたのは四四年十月十二日から十六日の五日間、その図上演習が始まったのは七月二十三日、「捷号作戦」のために第二航空艦隊（二航艦）が創設されたのは六月十五日にさかのぼる。

捷一号のねらいはウイリアム・ハルゼー大將率いるアメリカ海軍機動部隊第三十八機動部隊の殲滅とされた。各航空部隊から搭乗員を集め、昼間攻撃隊、薄暮攻撃隊、悪天候下でも攻撃可能な「T攻撃部隊」が編成された。福留繁中将を司令官とし、海軍爆撃機「銀河」、艦上攻撃機「天山」、陸軍爆撃機「飛龍」など千二百五十一機である。

十月十二日、アメリカ第三艦隊の航空機千三百七十八機が台北を空襲した。四三年十一月二十五日、中国・江西省遂川（Suchuan）から飛来した十四機のB-24による新竹爆撃以来の空襲だった。

「ハルゼー艦隊現わる」

の報で、同日の薄暮、約百機が出撃した。曇天の日暮れで照明弾の効果がなかった。アメリカ側の対空砲火で五十四機が未帰還となった。

翌十三日にもアメリカ第三艦隊は約九百五十機が台湾を空襲した。このときも薄暮攻撃に二十八機が出撃した。アメリカ第三艦隊は日本軍の暗号を解読していて、連合艦隊司令長官・豊田副武大將が台湾の新竹基地に滞在している

ことを掴んでいた。

山本五十六がソロモン上空で撃墜死、古賀峯一はセブ島で遭難死と、連合艦隊司令長官は二代続いて不遇の死を遂げていた。豊田を空襲で死ぬようなことがあったら、二航艦の責任は限りなく重い。

ということから、福留中将は十四、十五、十六と連日の索敵、追撃に専念した。ばかりでなく連合艦隊司令部は第五艦隊（支那方面艦隊…重巡洋艦「那智」「足柄」などで編成）に追撃命令を出していた。

十二日の未帰還五十四機を含め、五日間で日本軍が被った損害は三百十二機、出撃した六百四十四機に占める損失率は四八・四％に達した。連合艦隊司令長官の滞在、乾坤一擲の大戦果への意欲、戦況転換への希望的観測といった様ざまな要素が錯綜した。豊田長官に大戦果を報告しなければならぬ。

このときの戦果を日本軍司令部は次のように評価した。

12日 空母六ないし八隻を撃沈

13日 空母三ないし五隻を撃沈

14日 第一次攻撃隊ハ空母三

第二次攻撃隊ハ空母二二夫々相当ナル損害ヲ与ヘ

得タルコト確実

15日 轟沈 戦艦一

撃沈確実 大型空母一、小型空母一、甲巡洋艦一
沈没ほぼ確実 小型空母一、戦艦一、乙巡洋艦一

「戦果」を合計すると、アメリカ艦隊は少なくとも空母十一隻、戦艦一隻、巡洋艦一隻を失ったこととなる。ということは、アメリカ第三十八機動部隊は消滅したはずだった。

大本営発表

十月十五日十五時付

台湾東方海面の敵機動部隊は昨「ハ」日来東方に向け敗走中にして、我が部隊は此の敵に対し反覆猛攻を加へ戦果拡充中なり。現在までに判明せる戦果（既発表のものを含む）左の如し

轟撃沈 航空母艦七隻 駆逐艦一隻

（註）既発表の艦種不詳三隻は航空母艦三隻なりしこと

判明せり

撃破 航空母艦一隻 戦艦一隻 巡洋艦一隻

艦種不詳十一隻

十七日十六時付

我航空部隊は明十六日台湾東方海面に於て新たに来援せ

る敵機動部隊を追撃し、航空母艦、戦艦各一隻以上を撃破せり

十九日十八時付

我部隊は十月十二日以降連日連夜台湾及「ルソン」東方面の敵機動部隊を猛攻し其の過半の兵力を壊滅して之を潰走せしめたり。

(一) 我方の収めたる戦果綜合次の如し

轟撃沈 航空母艦十一隻 戦艦二隻 巡洋艦三隻 巡洋

艦若は駆逐艦一隻

撃破 航空母艦八隻 戦艦二隻 巡洋艦四隻 巡洋艦

若は駆逐艦一隻 艦種不詳十三隻

撃墜 一二機(基地における撃墜を含まず)

(二) 我方の損害飛行機未帰還三二機

(註) 本戦闘を台湾沖航空戦と呼稱す

これに対して、大本営や海軍軍令部の内部に再調査の必要を指摘する声がないではなかった。ところがそうした声は

「消極的である」

「国民の士気を喪失させるものである」

という理由で無視されてしまった。

あまつさえ、

——残敵を掃討し、敵損傷艦を拿捕すべし。

という命令まで出した。のちに権力サイドが流す偽情報

の代名詞となった「大本営発表」である。
赫々たる大戦果ではないか。この報道に日本国民は歓喜した。「日本軍の反攻が始まる」と喧伝された。

三

十月十六日、台湾から飛び立った索敵機が台湾東方四百三十哩の海上に空母七隻からなる敵機動部隊が航行しているのを発見した。この知らせは大本営を大混乱に陥れた。恐慌をきたしたといっている。

翌十七日になると、今度はフィリピン島レイテ湾沖に米海軍機動部隊約十隻が姿を現わした。そればかりか総艦数七十隻にも達するアメリカ海軍第三十八任務部隊が、海面を埋め尽くしているのが発見された。この時点で初めて、大本営は台湾沖航空戦の戦果にとんでもない誤認があったことを知った。

このとき、第三艦隊司令長官ハルゼーは、旗艦ニュージヤージーからニミッツ(太平洋艦隊司令長官兼太平洋戦域最高司令官)に宛てて

——近頃、ラジオ東京が全滅したと報じた第三艦隊の艦船は、海中から引き揚げられ、日本艦隊に向けて高速で撤退中。

——という電報を発していた。

台湾沖航空戦の戦果は、帰投した攻撃機搭乗員の報告に基づいていた。

——彼らは口々に

——爆弾が空母に命中した（と思う）。

——炎上しているのを見た。

——と報告した。

いくつかの報告は正しかったが、多くは想像であつたり見間違えであつたりした。機関を全開にして回避行動を取る艦隊が吐き出す重油の煙を、命中弾による火災と勘違いしたこともあつたらしい。

——この報告を鹿屋基地参謀が都合よく解釈した。

——だけでなく、搭乗員の質問に当たつた将校たちが誘導的な尋問を行つた。

——敵艦からあがる煙は、味方の爆弾が当たつたものではないか？

——と訊ねられ、初年兵は

——かも知れません。

——と回答した。

——いや、違うと思います
と答えることができない圧力があつた。
すると

——爆弾が命中したものと認める。

——ということになった。

——その繰り返しが行われ、

——命中弾三発であれば中破ないし大破と考えてよからう。

——さらに火災が発生していれば沈没したかもしれない。

——いや沈没したであろう。

——ということになって行つた。

開戦から一、二年のころは猛特訓を受けた戦闘機乗りがいくらでもいて、戦果を厳しく評価することが教育されていた。ところが戦局が劣勢になつていたこともあつて、希望的観測が安易に入り込んだ。

——ミッドウェー海戦のあと、大本営は

——「希望的観測に基づいて戦果を評価しないように」

と全軍に通達していたが、苦戦を強いられていた最前線では少しでも希望を見出そうとし、また各軍の司令本部も「戦果」を強く求めていた。大本営の通達は事実上、反故になつた。

——情報の収集と評価はきわめて恣意的であつて、その集積

を綿密かつ客観的に分析する作業は全く行われなかった。現今の成果主義がもたらす弊害と相通じるところがある。

この戦果誤認がもたらした被害は、大きかった。

四四年十月二十三日から二十六日にかけて行われたフィリピン沖海戦は、アメリカ太平洋艦隊の主力は消滅した、という前提で立案されていた。マリアナ沖海戦と同じ過ちを海軍軍令部は犯したことになる。

台湾沖航空戦に攻撃機を動員したため、フィリピン航空部隊の稼動機数は三十五機に減っていた。航空機の援護がないまま、連合艦隊はフィリピン沖海戦（レイテ沖海戦とも）十月二十二日・スリガオ海峡海戦、同二十四日・シブヤン海海戦／エンガノ岬沖海戦、同二十五日・サマール沖海戦の総称）で空母「瑞鶴」「瑞鳳」「千歳」「千代田」、戦艦「武蔵」「扶桑」「山城」のほか艦船三十を失い、南方艦隊は壊滅してしまった。

かつ、フィリピン駐屯の山下奉文率いる陸軍第十四方面軍が連合軍に降伏して以後、アメリカ軍はB-29による日本本土空襲を楽々とできるようになった。日本軍がミッドウェー島を足がかりにアメリカ本土を爆撃しようと考えたことを、今度はアメリカ軍が実行する番だった。

だけでなく、アメリカ軍は日本軍が作ったゲラム、サイパン、テニアン（テニアン）の飛行場を拡張して大型爆撃機が離発着で

きるようにした。「不沈空母」化したのである。源田の構想を逆手に取ったともいえるし、戦争である以上、アメリカが同じことを考えたとして少しもおかしくない。

四

興味深いのは、アメリカ海軍は南西太平洋方面最高司令官ダグラス・マッカーサーに「エレクトロン作戦」の自己検証を求めていたことである。エレクトロン作戦は太平洋の島々を占拠している日本軍を放置（無視）して、ニューギニア島↓ルソン島↓台湾島と、飛び石式に軍を進めることに狙いがあつた。

マッカーサーはB-29の実戦配備やマンハッタン計画のことを承知していたので、少しでも早く日本に白旗を上げさせたかった。それは新婚旅行で訪れた日本に大量の爆弾を落としたり、大勢の日本人を殺害することを忌避したかったばかりはなく、アメリカに最終的な勝利と世界に平和をもたらした將軍として歴史に残ることを求めていたためだった。

実際、マッカーサーは陸軍参謀本部に予想される詳細なスケジュール（予定）を提出していた。「レノ計画」がそれで、キングII作戦の着手（ルソン島リンガエン上陸…四

五年一月六（九日）は予定より四十日も早かった。

このときからポツダム宣言無条件受諾から四日後の八月十九日まで、ルソン島ではウォルター・クルーガー中将麾下のアメリカ陸軍第六軍と山下奉文大将麾下の日本陸軍第十四方面軍の間で血みどろのジャングル戦が繰り広げられた。

書きそびれたのは、台湾沖航空戦における日本軍航空機の損失である。投入した航空機は延べ六百四十四機に及び、損失は三百機を上回った。それだけでなく、この攻撃では第二十六航空戦隊司令官・有馬正文少将自らが一番機に乗り込み、敵空母にめがけて突撃、自爆している。

有馬の自殺行為は彼個人の死のみを意味しなかった。二百五十キロ爆弾を装着した航空機を敵艦船に突入させる特別攻撃、いわゆる「特攻」が正規の作戦として組み込まれ、以後、無為な死が積み重ねられていく。

十月二十日、アメリカ軍がフィリピンに上陸し、マッカーサー大將が「自由の声」放送で

「アイ・ハブ・リターンズ」（わたしは帰ってきた）と放送した。コレヒドール要塞から脱出したときに発した「アイ・シャル・リターン」に対応させた言葉だった。

十月二十四日、「大和」の姉妹艦として建造された「武蔵」がフィリピンのシブヤン湾に沈没した。アメリカ軍の攻撃機二百六十四機が五波にわたって殺到し、魚雷十五本、爆弾二十発を命中させた。世界に誇った四十六センチ砲は、一度も戦艦決戦に使われることがなかった。

十一月五日から十一日にかけて、ブーゲンビル島沖で激しい航空戦が展開された。日本海軍は航空機百七十八機、搭乗員七百二十八人を投入し、百二十一機と約四百人が失われた。

一九四五年三月一日、硫黄島の日本軍が全滅した。戦死者は日本軍の約二万二千に対し、アメリカ軍は約二万五千人に達した。アメリカ海兵隊の戦死者数が守備隊の戦死者数を上回ったのは、硫黄島の戦いが唯一である。

三月十日、東京の夜空をB-29の大編隊が覆い、大量の焼夷弾と爆弾を投下した。グアム、サイパン、テニアン、の三航空基地から飛び立った計三百三十四機が投下した爆弾と焼夷弾は二千トンに達した。東京の町は火の海となり、家屋二万七千軒以上が焼け、市民八万四千人が死亡、百万人を超える市民が被災した。

三月十三日の深夜には、四時間近くにわたって大阪が空襲を受けた。数次に来襲したB-29は計五百五十機に及んだ。上空二千米トールの低空から一般家屋をねらってクラスタ焼夷弾が落とされた。これにより約五千人の死

者・行方不明者が出た。

爆撃は十二日名古屋、十四日大阪、十七日神戸と連続し、アメリカ軍が日本本土を焦土化する作戦が明らかになった。しかし迎撃に飛び立つ戦闘機は数少なく、B-29には高射砲も届かなかった。

設計・試作の段階にあった本土防衛用の局地戦闘機「烈風改」、夜間戦闘機「電光」、陸上戦闘機「陣風」、高速戦闘機「火龍」「震電」、特攻機「桜花」、哨戒爆撃機「大洋」、対潜哨戒攻撃機「東海」、重戦車「カト」「ホリ」などは木っ端微塵に破壊されていた。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

**空母「信濃」** しなの…大和型戦艦の三番艦として建造されていたが、ミッドウェー海戦で喪失した空母の穴を埋める目的で空母に改造された。通常の空母というより「洋上移動航空基地」という発想が強かった。源田實の第一航空艦隊構想を船で実現したかった。だった。

八百キロ爆弾の水平爆撃にも耐えられるよう防御が施され、「大鳳」と同様に飛行甲板に七十五ミリ装甲板が張られた。四四年十一月二十九日、横須賀から呉に回航していたとき、浜名湖の南方沖合いでアメリカ海軍の潜水艦「アーチャーフィッシュ」が放った魚雷四本が右舷に命中し、和歌山県潮の岬南方四十八キロで転覆・沈没した。

**源田 實** げんだ・みのる／1904～1989。海軍兵学校五十二期(一九二四年卒)、二七年海軍砲術学校を経て霞ヶ浦海軍航空隊に入った。日中戦争で日本の制空権確立に貢献したあと十二式戦闘機(のち零式艦上戦闘機)の開発に参画した。真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦では旗艦・空母「赤城」に参謀として乗艦した。大艦巨砲主義に立たず航空機の戦略的活用を本意とした。

**台湾沖航空戦** このときアメリカ海軍はレイテ上陸作戦を前に日本軍の航空兵力の撃滅をねらいハルゼー大將が率いる第三十八任務部隊をもって日本軍航空機をおびき出した。暗号解読によって日本軍の動きは逐一知られていた。日本軍は戦略的な罠に落ちたのである。

**第三十八任務部隊** 正規空母九、軽空母八、戦艦六、巡洋艦十四、

駆逐艦五十八、護衛空母十一、給油艦三で成っていた。日本軍航空機による被害は重巡洋艦「キャンベラ」と軽巡洋艦「ヒューストン」が大破したに過ぎなかった。

**サンチ** センチメートルと同義。明治初期、日本陸軍は兵制をロシアに学んだため兵器の単位などにドイツ語読みが定着した。これに対して海軍はイギリス流兵制だったためインチ、ポンドが使われた。

**フィリピン沖海戦**(レイテ沖海戦) フィリピン再上陸・奪回を目指すアメリカ軍と絶対防衛ライン死守をねらう日本軍が総力を傾けて戦った。十月二十四日のシブヤン海海戦、二十五日のサマール沖海戦、エンガノ沖海戦、スリガオ海峡夜戦など様々な名で呼ばれている。

帝国海軍は艦隊主力をレイテ湾に突入させる作戦だったが、「大和」の姉妹艦である超弩級戦艦「武蔵」、戦艦「山城」「扶桑」、空母「瑞鶴」「瑞鳳」「千代田」「千歳」、重巡「愛宕」「摩耶」「島海」「筑摩」「鈴谷」「最上」、軽巡「能代」「多摩」「阿武隈」、駆逐艦「山雲」「朝雲」「満潮」「野分」「早霜」「藤波」「不知火」「秋月」「初月」などを失う結果となった。神風特別攻撃隊「敷島隊」がアメリカの護衛空母「セント・ロー」を撃沈したのはこのときだった。

**四式重爆撃機「飛龍」** ひりゅう…全長十八メートル、全幅二十二・五メートル、最高速度五百三十七キロ/時、爆弾積載量一トン、十二・七ミリ機銃三基、二十ミリ機銃一基を備えていた。

**局地戦闘機「烈風改」** れつぷうかい…零戦に代る次期主力戦闘機として四四年十月に完成した「烈風」をさらに大型化し、排気タービン過給器、三十ミリ砲を主翼に四、胴体後上斜めに二の計

六門を装備した。

**夜間戦闘機「電光」** でんこう…海軍試作丙戦闘機として最初から夜間戦闘を目的に開発された。機首にレーダー、三十ミリ機銃二基、二十ミリ機銃二基および遠隔操作式二十ミリ連装旋回機銃一基を装備する予定だった。全装備自重が約十トンという大型機で最高速度は六百六十九キロ/時を記録、四五年八月の完成を目指したが同年六月の空襲で設計図、試作機のいずれもが全焼・破壊された。

**陸上戦闘機「陣風」** じんぷう…全長十・一二メートル、全翼幅十二・五メートル、自重三・五トンの単座式で、最高速度は六百八十五キロ/時、高度一万メートルで三千四百二十五キロを航続できる設計だった。主翼に二十ミリ機銃四ないし三十ミリ機銃二基、機首に十三ミリ機銃二基を装備した実物模型までできたところで終戦となった。

**高速戦闘機「火龍」** かりゅう…中島飛行機が設計を完了した段階で終戦を迎えた。

**高速・高高度局地戦闘機「震電」** しんでん…全長九・七メートル、全翼幅十一・一メートルで機体の最後尾にプロペラを置き、後退翼と垂直尾翼を百八十度回転させた設計だった。最高速度は七百五十キロ/時で爆弾二百四十キロを装着でき、三十ミリ機関砲四門、七・七ミリ機銃二基を装備した。

**特攻機「桜花」** おうか…火薬を爆発させて推力を得る火薬式ロケットで最高速度八百七十六キロ/時を達成した。一式陸攻ないし九七式艦攻で懸垂し、敵艦隊の近くで切り離して突入する特攻専用機として開発された。一千二百キロ爆弾に翼とロケットエンジンを付け、操縦できるようにしたといったほうが正しい。

**哨戒爆撃機「大洋」** たいよう…金属不足から機体を木製にしたものだったが、完成しないまま終わった。

**対潜哨戒攻撃機「東海」** とうかい…視界をよくするため機首をガラス張りにし、低空での哨戒と攻撃を安定させるため双発とした。九州飛行機が開発しわずかに実戦配備されたが十分な性能を発揮しないうちに終戦となった。

**重戦車「カト」** ソ連軍の重戦車「スターリン」との決戦を想定して開発が進められた。口径百五ミリの対戦車砲を固定装備し射程一千メートルで厚さ二百ミリの鋼板を打ち抜くことができた。連合国軍の主力戦車「M4」が相手であれば一撃で宙に吹き飛ばしたとされる。

**重戦車「ホリ」** カトと同じく百五ミリ砲を搭載し、砲塔が回転する方式を採用し、かつ前面装甲の厚さを百二十五ミリにして防御力を強化した。満州におけるソ連機械化部隊および本土決戦を想定して設計されたが、鉄鋼の不足から実現には至らなかった。

072 火炎

第七十二

火 炎

一

一九四四年六月にサイパン島守備隊が連合国軍に降り、七月にグアム島が陥ちた。十月にはフィリピンに連合国軍の上陸が始まり、太平洋戦争の次の戦場は中部太平洋では硫黄島、南西諸島では沖縄になることがはっきりした。

大本営はそこで西南諸島防衛のため、第十軍幕下に第三十二軍を編成して沖縄の首里にその本営を置いた。とともに満州の関東軍から第九師団と第二十四師団を、中国大陸から第六十二師団と第四十四旅団および、第五砲兵団を転進させ、総兵力十万を沖縄諸島に配備した。司令官は牛島満である。

うち第九師団は関東軍の精鋭、第五砲兵団は大砲を専門とする重量感のある兵団であって、特に第五砲兵団は日本陸軍にあつてきわめて特殊な戦闘集団といつてよかった。

第五砲兵団を構成していたのは野戦重砲兵二個聯隊、重砲兵一個聯隊、独立重砲兵一個大隊、臼砲一個聯隊、迫撃

砲四個大隊、野戦高射砲四個大隊、独立速射砲三個大隊などで、径七十五ミリ以上の火砲計四百門以上という陣容である。

戦車が二十七両しかないこと、航空兵力が欠乏していることなど不備を数え上げれば切がなかった。十万の兵と四百門の火砲というのは、この時点で大本営が用意できた最大の陣容というほかなかった。海洋決戦が不可である以上、連合国軍を沖縄本島に引き付けるしかない。

この牛島の作戦はもろくも崩れた。

四十四年九月にアメリカ軍のフィリピン上陸が開始されると、大本営は沖縄の第九師団を台湾に転出させることを決めた。台湾を防衛しなければならぬ、というのが、アメリカ軍は陸軍第八軍、第六軍の計十二個師団・四十万人と総艦数七十を超える太平洋艦隊第三十八任務部隊を当てているのである。

にもかかわらず兵力の四分の一を割かれては沖縄防衛作戦の根本が崩れる。ばかりでなく本土防衛構想そのものが崩壊する。

翌四五年一月二十三日、牛島のもとに、姫路から第八十四師団を増派する、という報せが届いた。新兵ばかりだが、戦力には違いなかった。ところが同日の夕刻、

——第八十四師団の増派は中止。

ということになった。

——海上輸送の安全が確保されていない。

というのが理由だった。

牛島は唸った。

沖繩住民による決戦部隊が編成された背景には、以上のような事情があった。

まず満十七歳から四十五歳までの男子約二万五千人が、現地徴兵として第三十八軍に編入された。次いで男子中学生に通信員教育が、女子生徒に看護婦教育が行われ、半ば強制的に部隊が編成されていた。

男子中等学校上級生一千六百八十五人による「鉄血勤皇隊」(戦死七百三十二人)、女子中等学校上級生五百四十三人の女子挺身隊(戦死二百四十九人)がそれである。うち沖繩師範学校女子部と沖繩県立第一高等女学校の生徒二百二十二人による「ひめゆり部隊」の悲劇は、こんにちまで語り継がれている。

四月一日、アメリカ軍が沖繩島に上陸を開始した。作戦は「アイスバーグ」と名付けられた。アメリカ第五艦隊、イギリス機動部隊を合せた総兵力は正面主力十八万三千、後詰五十四万八千人、動員された艦船は一千三百十七隻、艦載機は一千七百二十七機だったと記録されている。対する日本軍守備隊は陸軍七万七千九十九人と、直前に配備

された海軍陸兵隊八千の計八万四千六百である。

戦いはアメリカ軍による嘉手納への爆撃と沖合いからの艦砲射撃で始まった。午前九時からの上陸作戦は日本軍守備隊が手薄だったためにたいした戦いもないうち、中、北の両航空基地を確保することができた。ただちにブルドーザーが大地を拓き、そこに鉄の板が敷き詰められ、大型輸送機が頻繁に往復した。その日のうちに六万の将兵と、戦車三百九十両などの重火器、トラック、食糧、医療部隊などが進出した。

同月六日、日本の連合艦隊は「菊水作戦」を発令した。戦艦「大和」が広島県徳山港を出港した。以下、軽巡洋艦「矢矧」、駆逐艦「冬月」「涼月」「磯風」「浜風」「雪風」「朝霜」「初霜」「霞」で編成する日本海軍最後の艦隊だった。

大和が沈没した四月七日、アメリカ陸兵が南進を開始した。

十二日、第六十二師団がアメリカ軍の前に立ちはだかった。しかし同師団はアメリカ軍の圧倒的な火炮によって損失を重ね、二十五日、ついに撤退した。

二十九日、天長節(明治天皇の誕生日)の日、牛島はそれまでの持久戦の方針を一転し、嘉手納の航空基地奪回を

図る攻勢に出た。大本営をはじめ上層の第十方面軍、第八飛行師団、海軍などから牛島に宛てて航空基地奪還のため「攻勢要望電報」が相次いで届いていた。

五月四日、反攻作戦が決行された。第五砲兵団が七十五ミリ榴弾砲一万発をアメリカ軍陣地に打ち込む一方、第二十四師団、船舶工兵で組織する第二十三、第二十六聯隊が左右から前進を始めたが、アメリカ軍の猛反撃にあつて諸部隊は損失を重ねていった。

翌五日十八時、作戦中止。

同月三十日、牛島は第三十二軍本営を首里から摩文仁八九高地に移すことを決めた。

那覇西方の守備に就いていたのは海軍陸戦隊八千である。実態は基地設営隊や航空隊整備要員などが半数を占め、陸戦の訓練を受けていたのは三千人に過ぎなかった。しかも小銃は五人に一丁しかなかった。

ここには六月四日、アメリカ軍が上陸した。海軍陸戦隊は航空機から外した機銃や手榴弾で戦ったが、二日後に完全に包囲された。包囲網がじりじりと狭められる中で肉弾戦が展開され、六月十二日に立つて戦うことができたのは二百七十人に足りなかった。翌十三日午前一時過ぎ、玉碎。摩文仁に埋伏した日本軍は正規兵力の八五%を失っていた。小銃は規定の五分の一、火炮は半分が失われた。にも

増して五月四、五の両日に行われた航空基地奪回の反攻で多くの指揮官が斃れていた。アメリカ陸軍第七師団が迫り、重戦車が登場すると、日本軍は夜間に奇襲的な攻撃を行うほか手立てがなくなった。

六月二十二日、第六十二師団長・中将藤岡武雄、自決。  
二十三日、第三十二軍司令官・中将牛島満自決。  
三十日、第二十四師団長・中将雨宮巽自決。

## 二

日本軍は航空機二千五百七十一機を繰り出して沖縄の守備隊を支援したが、六月二十三日に守備隊が壊滅した。サイパン島の激闘を境に、硫黄島、東京大空襲、沖縄上陸と、アメリカ軍は一般市民に対する無差別攻撃を一顧だにしなければならなかった。

そのために二十一人もの沖縄の住民が犠牲になった。避難民が籠もる洞窟に手榴弾や催涙弾を投げ入れ、逃げ出してきたところを機銃で掃射した。あるいは洞窟の上から火炎放射器を放つ「馬乗り」と呼ぶ戦法が編み出された。船が海を埋め、空を戦闘機が覆い、陸に鉄の雨が降り、血の川が流れた。

それでもなお大本営参謀本部は戦争の継続を計画した。

本土防衛は「本土決戦」に変わった。

軍として総兵員四十万人のほか、六十五歳以下の男子と四十五歳以下の女子による「国民義勇隊」、四十歳以下の女子による「国民戦闘隊」を編成し、ゲリラ戦を展開するという計画である。国民を総動員しての臨戦態勢だったが、それぞれに手渡す武器がなかった。

日清・日露のころの単発先込め式歩兵銃、家伝の刀剣を手に入れているのはマシなほうだった。軍が考えたのは竹槍や長銃、捕り物用の指股などだった。日の丸の鉢巻を締め、「エイツ」の掛け声で一斉に青竹を突き出しても、上空に飛来するB-29ばかりはどうにもしようがなかった。

こうした武器——というより、武器として使うことも可能な道具——の性能について参謀本部が示したのは、「射程距離はおおむね三四十メートル、命中率は五〇%」だった。

当たるも八卦、当たらぬも八卦みたいなもので、アメリカ軍の機械力の前に出たとたん、たちどころになぎ倒されること請け合いであった。それを見て、ときの首相鈴木貫太郎は「これはひどい」と呟いたと伝えられる。

そうこうしているうち、アメリカの工作船は日本の沖合いを悠々と遊弋して機雷を敷設していった。戦闘機は連日のように漁村の船舶を無差別に爆撃した。星のマークを付

けた航空機は百メートル以下にまで高度を下げ、機銃を乱射して市民を殺戮した。

——日本に非戦闘員は存在しないものと心得よ。という教唆があったといわれている。市民が殺戮されるのを見ても、軍は何もできなかった。

一九四五年七月。

この時点で日本軍の組織だった戦闘が行われていたのは、沖縄本島の南方、宮古・八重山群島である。ここには同年六月、陸軍一万三千の部隊が上陸し、航空基地を作り陣地を築いて徹底抗戦の構えを見せていた。日本本土（九州）への上陸を企図していたマッカーサー指揮のアメリカ陸軍第八軍は最初、宮古・八重山群島を立ち枯れさせる方針だったが、

——後背の憂いは除去しておくべきである。

という意見に従って連日の空爆と艦砲射撃が行われた。

宮古・八重山群島はかつて琉球王国の支配下にあったものの、やや海浪を隔てていたため半ば独立のかたちだった。加えて上陸してきた日本軍の兵士が島民の食糧を奪い婦女子に暴行を働いた。ために島の住民は日本軍に反感を持った。また連合国軍は出血を避けて無理な戦闘を行わなかった。このため沖縄本島ほどの悲惨な事件は少なかった。



八月十七日に沖繩本島から陸軍の伝令がきて、守備隊に敗戦を伝えた。同月二十五日、武装解除。

余談だが、宮古・八重島群島の住民は、武装解除後の旧日本兵による乱暴狼藉から生活を守るために「自警団」を組織した。その指導者的存在だった登野城地区青年団の団長・宮城光雄と副団長・豊川善亮は、

——日本から独立しようではないか。  
と話し合った。

二人は大川地区の青年団長・本盛茂、石垣地区の青年団長・内原英昇の賛同を得、かつ南部琉球地区軍政長官であるジョン・デイル・プライス海軍少将の同意を得て、十二月十五日、石垣島の「八重山館」という映画館で郡民大会を開いた。

館内は熱気に包まれ、屋外に人があふれた。その中で「共和国」の樹立が宣言され、「八重山共和国」がここに誕生した。

元県会議員で小学校の校長だった宮良長詳（長義とも）を大統領に選出し、第一に食糧の確保と安定供給、第二にマラリアの撲滅、第三に治安の回復、第四に財源の確保——などを決定した。しかし八日後の十二月二十三日、沖縄軍政当局からの通達で琉球政府に編入されてしまった——という逸話がある。

### 三

ともあれ一九四五年。

その七月二十六日未明のことである。

マリアナ諸島サイパン島のアメリカ軍テナン基地から三機のB-29爆撃機がひっそり離陸した。この時点でアメリカ軍は、サイパン島の日本軍守備隊を壊滅させ、護衛の戦闘機をつけずに爆撃機を発進させることが珍しくなくなっていた。

テナン基地を発進した三機の大型爆撃機は、空襲警報が鳴り響く快晴の仙台市上空をゆうゆうと飛び去り、日本時間の午前八時二十分過ぎ、新潟県と福島県の県境にある小さな集落にさしかかった。眼下に川の流れが白く光り、操縦席の前方に二つの山塊が見え始めた。

百人一首に、猿丸という大夫が詠んだ歌が入っている。

おくやまにもみじふみわけなく鹿の

こゑきくときぞ秋はかなしき

この歌を詠んだのが、この町の奥山に流れる「実川」という溪流のほとりだった、という。実川は「さねがわ」と

読み、町の名を「鹿瀬」という。

このとき、山の中腹に開墾された段々畑で、町の住民と外国人——イギリス、アメリカ、カナダの捕虜——たちが共同で農作業にいそしんでいた。捕虜は敵なのだから厳しく監視しなければならなかったのだが、純朴な住民たちは遠来の外国人たちと仲良くやっついていこうと考えていた。

その町には、ドイツ人技師が設計した、当時、国内で最大規模の水力発電所と、化学肥料の工場があった。大本営はこの施設を空襲から守るため、ほど近くにアメリカ兵の捕虜収容所を設けていた。味方の捕虜が大勢いる町に爆弾を落としたりしないだろう、と考えたのだ。

見たこともない大きな飛行機を発見した町民は大騒ぎになり、連合軍の捕虜たちは被っていた帽子を手にとって、上空に向かって振った。銀色の機体は、向かいの山の上空八千四百メートルで反時計回り——つまり機首を左に——旋回し、やや高度を下げた。と、その機体の腹部が開いて、大きな爆弾が落とされた。町民はパニックに陥った。

「爆弾が投げ出された瞬間に、ガランガランという音がしたっけね」

と、その町の古老は言う。

ガランガランは落下速度を調整するための回転尾翼の音だった。

「お尻に落下傘みてえなモンがついとったな」

この目撃証言は正しかった。

爆弾は落下傘のために横に流され始めた。

「アアッ」

悲鳴に近い声が上がった。

爆弾が流されながら落下するその先には小高い丘があって、その丘を越えたところに小学校があった。学校には一年生から六年生まで七百人以上の子どもたちがいて、一時間の授業が始まったばかりだった。警報を鳴らす間もなかった。

幸いにも爆弾は小学校の手前の丘に着地して爆発した。TNT火薬が岩を砕き、そのかたまりは杉の木立をへし折って山の斜面を転げ落ち、地面を削った。破裂した爆弾の破片と小石が混ざった飛礫が人々に襲いかかった。このために何人かが額から血を流した。

小学校では、なにか異常を感じた教員が、「避難！」と叫んだ。

子どもたちは日ごろの訓練どおり、机の下にもぐりこみ防空頭巾を着用した。瓦の屋根と木造の校舎に小石の飛礫が当たって激しい音を立て、ガラスが割れた。怪我人は出なかった。

大音響が鳴り止んだとき、丘には爆弾が当たった部分だ

け、薄茶色の地肌がのぞいていた。数時間後、複葉の赤トンボが飛来し、上空から写真を撮影した。

アメリカの爆撃機は都市や港湾を空襲した帰路、残った爆弾を「ついで」に落としていくことがあった。その場合でも、彼らは工場や港湾にねらいをつけた。ところが今回は人家も道路もない山の中である。しかも落としたのは一個の爆弾だった。赤トンボの操縦士は首を傾げた。

このことは正規のルートで大本営に伝えられた。ものすごく大きくて落下傘が付いていたということに、わずかに注意が払われた。だが、人口が数千人にも満たない山奥の小さな町であるし、死者も出ていない。要するに「取るに足りないこと」だった。

実をいうと、この三機はアメリカ軍が「パンプキン作戦」と呼んだ新型爆弾を投下する予行演習だった。一機は爆弾投下機、一機は観測機、一機は写真撮影機だった。演習は「成功」と評価された。このような模擬爆弾の投下は、戦後公開されたアメリカ軍の機密資料によると、前後十六回（一説に三十回以上）行われていた。

アメリカ軍は新型爆弾を投下する候補地として、札幌、仙台、新潟、京都、大阪、広島、小倉、長崎などを想定していた。投下演習は、それぞれの都市に向けたものだったと想像していい。

それから二週間後、本物が広島に投下された。

「リトル・ボーイ」と名づけられたその爆弾が市中心部の上空五百七十メートルで爆発した瞬間、厚い鋼板に密閉されていたウランに化学反応が促され、TNT火薬二万トンに相当する破壊力と摂氏三万度の光熱が発生した。

その光熱は秒速四十五メートルの猛烈な強風によって運ばれ、六千度まで低下した熱が市民二十万人の命を瞬時に奪った。続いて九日、長崎にも新型爆弾が投下され八万人が死傷した。

新潟の山奥に原爆の模擬爆弾が落とされた話は、筆者が七歳から十二歳まで住み暮らした町の物語として、同町出身の研究者・沖田信悦が語っている。五十年以上を経た現在、模擬爆弾がそぎ落とした山の崖は緑に覆われ、何こともなかったかのように装っている。

語る人も次々に鬼籍に入り、記憶は薄れつつある。それで、あえてそのこと書いた。

#### 四

新型爆弾とは、いうまでもなく原子爆弾である。日本軍は八月七日に広島に調査団を派遣し、原子爆弾が使われたことを察知したが、国民には知らせなかった。長崎に再び

きのこ雲が発生したとき、それを遠方から目撃した本土防衛軍の兵士たちは、歓喜の声を上げさえもした。

——研究所が新型爆弾を完成した。

という情報が流れていたためだった。このことはのちに栃木県計算センター（のち「TKC」と改称）を創業した飯塚毅が陸軍見習士官として熊本県田原坂に駐在していた四五年八月九日の記憶として語っている。

だが、それはまったくのデマだった。

なぜアメリカは原爆を使ったか、という疑問に対して、「ソ連が参戦する意思を示したためである」

という説明がなされる。大統領トルーマンは少しでも早く、アメリカの力で日本を降伏させ、戦後体制をアメリカ主導に導こうと考えた、というのである。

戦後になってアメリカ陸軍長官・スチュムソンは

「原爆投下の目的は満州に侵攻し始めたロシアが日本本土に到達する前に、できるだけ早く降伏を実現することであつた」

と述べ、国務長官バーンズは

「原爆は、日本を打ち破るために必要なのではなく、ソ連を最もコントロールしやすくするためだった」と証言している。

「生体実験ではないか」

という指摘もある。

事実、アメリカ、イギリス、中国、ソ連の四か国首脳によつて開かれたポツダム会談のさなか、トルーマンは原爆実験成功の報告を聞き、軍部は完成したばかりの二種類の原子爆弾の破壊力をテストする必要があると主張した。それで一発を広島に、違う種類の一発を長崎に落として、殺傷能力や人体に与える影響を実験した、という。

たぶん、どちらも当たっている。

日本政府の戦意をいかに喪失させるか、新型爆弾の威力をどのように測るか、の二つの観点から、アメリカ軍は史上まれな、欺瞞的な手口を使った。それは日本軍の真珠湾奇襲攻撃をののしることができない以上に卑劣なものだった。そのことを、当時、呉海軍工廠に勤務していた若木重敏という技術大尉が、終戦後、執念をもつて調べ上げた。

八月六日、午前七時過ぎ、一機のB-29が広島市の上空に飛来した。これはテニアン基地から先発した天候観測機「Esary」（エザリー）号だった。原爆を積んだ「Enola Gay」（エノラ・ゲイ）号は、それから一時間十分の後方を飛行している。

広島市では、エザリー号の飛来に対応して空襲警報が鳴り響いた。市民は朝食を放り投げて防空壕に避難した。七時三十一分、空襲警報が解除され、市民は朝食をそそくさ

と済ませ、出勤、通学に表に出た。

エノラ・ゲイ号は新浜沖上空に待機していた。

エザリー号から

「ヒロシマでは警報が解除された」

という通信を受け、原爆を投下した。

アメリカ軍はネバダ砂漠で行った実験で、原子爆弾は物陰に潜むものに対して直接的な大きなダメージを与えることができないことが分かっていた。いきなりエノラ・ゲイ号が接近したのでは、広島市民の多くが防空壕に避難してしまう。

そこでエザリー号を先発して市民を緊張させ、警報解除で安心し、かつ出勤や通学に気が急いたときを見計らって投弾した——というのである。

次いで八月九日には、「グレート・アーティスト」と名付けられたB-29が長崎の上空で二発目の原子爆弾を投下した。晴れ渡った空の下が地獄になった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

牛島 満 うしじま・みつる／1887～1945。鹿児島県に生まれ一九〇八年陸軍士官学校卒、一六年陸軍大学校卒。三六年歩兵第一連隊長として二・二六事件の処理に当たった。三七年歩兵第三十六旅団長として南京攻略戦に参加、三九年予科士官学校校長兼陸軍戸山学校校長、同年十二月第十一師団長、四一年満州・公主嶺学校校長、四二年陸軍士官学校校長を経て四四年八月八日第三十二軍司令官として沖縄に赴任した。

戦艦「大和」の撃沈 アメリカ海軍は潜水艦で魚雷攻撃することをミッチャー提督に進言したが、ミッチャーは「偉大な戦艦を潜水艦攻撃で沈めるのは軍人として忍びない」として航空機を発進させた——というエピソードがある。沈没したのは九州坊の津沖百五十キロの地点で、乗員二百五十六人が救出された。片道の燃料しか積んでいなかったという説には異説もある。

本土決戦 計画は四五年二月に立案され、想定戦場は「本土」と「朝鮮」に絞られた。配置する兵力は次のようだった。

・本土…師団四十三（うち満州から転用三）、独立混成旅団十六、戦車旅団六

・朝鮮…師団四、独立混成旅団一、低装備師団三
・総兵員…四十万人／馬匹…四十七万頭／自動車…一万二百台／輸送車両…七万台／兵站要員…百九十万。

・「国民義勇隊」「国民戦闘隊」計二千八百万人。

・戦闘機八百七十機、高射砲一千二百門。

戦闘に使用可能な航空兵力は陸海合わせて一千五百機足らず、兵

器の充足率は小銃が五〇%、軽機関銃が二三%、歩兵用火器が二八%という有様だった。

宮古・八重山の戦争 連合国軍の空爆と艦砲射撃によって宮古島で三千二百四十五人、八重山群島で六千百九十九人が死亡している。このうち四千人は石垣島守備隊を乗せた輸送船が撃沈したときの溺死者だった。

宮良長詳 みやら・ちようしょう／1894～1965。八重山共和国大統領（八重山自治会会長のあと八重山支庁長を務めた）。**猿丸大夫の歌碑** 新潟県東蒲原郡阿賀町鹿瀬の角神（つのがみ）ダム脇の公園にその歌を刻んだ石碑がある。

沖田信悦 おきた・しんえつ／1946～…一九六九年明治大学を出て千葉県船橋市で古書籍商「鷹山堂」主人。著書に『千葉県古書籍商組合略史』（一九九六）、『琥珀色の彼方 鹿瀬町とハーマニカ長屋』（一九九七）などがある。

広島への原爆投下 二発の原子爆弾をサンフランシスコ港からテナン基地まで運んだのはアメリカ海軍重巡洋艦「インディアナポリス」、「原子爆弾を落とした人」はポール・ティベッツ大佐（広島）、チャールス・ウィーニー少佐（長崎）、作戦を立案したのは太平洋戦略空軍参謀長だったカーチス・ルメー中将である。インディアナポリス号はテナンからの帰路、日本海軍潜水艦「伊五八号」によって撃沈された

日本本土上陸作戦 「ダウンフォール作戦」と呼ばれ、七月七日に発動されていた。九州上陸を前提とする「オリンピック作戦」と、関東上陸を目指す「コロンネット作戦」で構成されていた。オリンピック作戦は陸軍のマッカーサー将軍が、コロンネット作戦は海軍のラムゼー提督が指揮を取る手はずだった。

若木重敏 わかぎ・しげとし／1916～2016。秋田高校から九州大学農学部及び京都大学理学部に進み海軍広島分遣研究所所長として特殊火薬類の研究に従事した。のち協和発酵工業（のち協和発酵キリン）副社長となった。「ユング・ホルツ」のペンネームで創作活動も行った。

日本IT書紀 04 含牙篇 卷之九 修羅

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。